

ルドルフ・シュタイナー
神秘学の記号と象徴
そのアストラル界と霊界との関係

yucca訳
神秘学遊戯団発行

第一講

シュトゥットガルト 1907年 9月13日

秘密（オカルト）の記号とアストラル界・霊界との関係。人間の記号としての五芒星（ペンタグラム）、叡智の像としての光。「叡智の働きかけ」によるアストラル体の変成と高貴化。地球の未来の進化。内的な光を獲得するための修練。叡智の光と天球の音楽。天球の調和（ハーモニー）と惑星運動。アトランティス人の知覚。人体の比率としての箱船。

ここシュトゥットガルトでこれから行います四回の講演は、いくぶん内密な性格を持つことになると思います。何といたっても皆さんの大部分は神智学協会に属され、すでに長年に亘って神智学の根本理念に親しんでこられ、従ってこの分野のより内密な題材に精通したいとお望みでしょうから。これらの講演で扱いますのは、アストラル界及び霊界と関連する秘密（オカルト）の形象と記号です。一連の秘密の象徴と形象のより深い意味を述べるつもりです。その際、初めの二回の講義で、いくらか奇妙に聞こえることがあっても、三回、四回と進みますと、完全な説明が得られるということにご注意いただきたいと思います。事の性質上、そういうことになるのです。神智学の講演は、いわば唯物主義的なやり方で単純な要素の上に組み立てられた他の講演とは違うのですから。最初はどうしても不明確な点があり、それが次第に明確に理解できるようになっていきます。

形象や記号は、通常の世界のみならず、神智学の世界においても、しばしばただひとつの《意味》を表す、多かれ少なかれ恣意的な何かであるという印象を与えますが、これはまったく正しくありません。皆さんもすでにそのような形象や記号について聞かれたことがおありでしょう。例えば、宇宙のさまざまな惑星が記号で示されることなどです。また、神智学のアレゴリーにおいてよく知られた記号は、いわゆる五芒星（ペンタグラム）ですね。さらに、ご存知のように、さまざまな宗教において、光というものは、叡智の、霊的な明澄さの意味で言及されています。さて、このような事柄の意味を問えば、これはしかじかのことを意味するといった表現を聞いたり読んだりなさるでしょう。例えば三角形は高次の三性を表す云々。神智学の著作や講演でも、たびたび神話や伝説が解釈され、「これはしかじかのことを意味する」と言われます。感覚の背後、この意味の本質の背後に至ること、このような形象の真実を認識すること、これを、この連続講演の課題といたします。これがどういうことか、ひとつ例を挙げて説明してみましょう。

五芒星（ペンタグラム）を考察してみましょう。ご存知のように五芒星についてはあれこれ詮索され解釈されておりますが、神秘学においてそういうことは問題になりません。神秘学者が五芒星について語ることを理解するためには、まず人間の本質の七つの基本要素を思い起こさなくてはなりません。ご存知のように、人間の本質は、七つの基本要素 - 物質体、エーテル体、アストラル体、自我、さらに霊我、生命霊、霊人（神智学文献では後三者はマナス、ブッディ、アートマ） - から成ります。手で触ることのできる物質的なものである物質体は除外しましょう。ここでとりわけ考察の対象になるのは、エーテル体です。エーテル体はすでに物質的な感覚にとっては隠されたもの、いわゆる「オカルト的なもの」に属します。通常の間ではエーテル体を見ることはできないからです。エーテル体を知覚するには霊視的な方法が必要です。実際にエーテル体を見ることができたら、むしろ物質体とは全然違うものです。エーテル体はたいていの人々が想像するような希薄な物質的な身体、一種の微細な霧の塊といったものではありません。エーテル体の特徴は、浸透してくるさまざまな流れから構成されているということです。エーテル体は実に物質体の建築家、形成者なのです。氷が水から形成されるように、物質体はエーテル体から形成されません。このエーテル体はあらゆる面に向かって、海のように流れに貫かれているのです。それらのうち主な流れが五つあります。両手両足を開いて立ってごらんください。人間の身体はこの絵のように表されます。

この五つの流れを人間はひとりひとり自らの内に隠し持っているのです。これらの流れが矢印に示された（図参照）方向にエーテル体を貫き、いわば人間のエーテル体の骨格を形成しているのです。絶え間なくこれらの流れはエーテル体を通り、これはその人が動いているときも変わりません。どんな姿勢をとってしようと、常にひとつの流れが、額の中心、眉間の一点から発して右足へ下り、そこから左手へ、さ

らに右手へ、それから左足、そこから再び額へもどります。五芒星と呼ばれるものは、エーテル体の中で人間の物質体そのもののように内的に動いているのです。ですから神秘学者（オカルティスト）が五芒星について、人間の図形として語るとき、それはあれこれ思案して作り出された何かのことを言っているのではなく、解剖学者が骨格について語るのと同じなのです。この図形は、現にエーテル体の中に存在していて、ひとつの事実なのであります。

こうしたわずかのことから、ある記号の実際の意味がどのようなものであるかがわかるのです。神秘学において皆さんが会おう記号や形象はすべてこのような真実に導いてくれるものです。五芒星は、エーテル体の動く《骨格》であり、それゆえ人間の図形なのです。これがこうした記号の本当の意味なのです。

図形や記号を用いる正しい指針を少しずつ獲得すると、それらは人間をしいに靈的世界の認識に導き、靈視力を獲得させる手段となります。瞑想において五芒星に沈潜する人にはこれらのエーテル体内の流れの道筋が見いだされます。これらの記号の恣意的な意味をあれこれ考え出すのが目的ではありません。瞑想においてこれらの記号と関わる時、 - - ただ忍耐強く行わねばなりません - - 秘められた真実に導かれます。これは、あらゆる形象や記号と同じく、皆さんがさまざまな宗教的古文献の中に見いだすことのできるものにもあてはまります、こうした形象は、深く神秘学に根ざしているものですから。預言者や宗教家が光について語り、光によって叡智を表そうとするとき、このことを単に彼が思いついたとか、才気煥発であろうとしてこのような表現を用いたとか考える必要はありません。神秘学者は事実立脚しているのであって、才知に富んでいるということは重要ではないのです。ただ真実であろうとするのみです。神秘学者として人は、無秩序な思考をする習慣を捨てねばなりません。すなわち、恣意的に結論を引き出したり、判断を下してはならず、一步一步靈的な事実を手がかりに、正しい思考を発達させていかねばなりません。

こうした光についての形象にもきわめて深い意味があり、ひとつの靈的な事実です。このことを認識するために、再び人間の本質に目を向けてみましょう。ご存じのように人間の本質の第三の構成要素はアストラル体であり、喜びと悲しみ、歡喜と苦惱、衝動、熱望と激情といった人間の内的魂的な体験が有するすべての担い手です。植物にはアストラル体がなく、従って人間や動物のような喜びや悲しみは感じません。今日、自然研究者が植物の感情について語るとき、そもそも感情の本質について完全な誤解に基づいています。アストラル体の正しい表象は、時代の経過とともにアストラル体の遂げてきた進化を追求するときのみ得られます。すでに以前、大宇宙での進化との関連における人間の進化を考察いたしました。その際、人間の物質体が人間本性の最も古く最も複雑な構成要素であること、エーテル体はそれほど古くなく、アストラル体はもっと若く、自我にいたっては人間本性のうち最も若いものであることを見てきました。その理由は、物質体はその進化においてすでに地球の四つの惑星状態を経てきたからです。私たちの地球が以前、土星状態と呼ばれる受肉状態にあったとき、すでに物質体は原基の状態で存在していました。その当時、はるか昔ですが、地球はまだ固体ではなく、人間はまだ今日の形態をとっていませんでした。ただ、その土星上には物質体の原基があったのです。けれどもエーテル体、アストラル体といった他の体はまだありませんでした。地球の第二の受肉状態、太陽上ではじめて人間にエーテル体が付与されました。当時、人間のエーテル体はきわめて明白に五芒星の形態を有していました。後にこの星の第三の受肉状態、月上でアストラル体が付加されることにより、これはいくらか修正されました。さらに月は、地球へと変わり、以上の三体に加えて自我が登場します。

さて、私たちは次のように問うことができます、これらの体は人間本性に受肉する前にはいったいどこにあったのか。例えば、太陽上でエーテル体として物質体の中に組み込まれたものは、古い土星上ではどこにあったのか。エーテル体というものもどこからかやってきたのに違いないのだから、と。エーテル体は、土星の周囲にあったのです、ちょうど今日、地球の周囲に大気があるように。後になって人間に組み入れられたものは、すべて古い土星の周囲に、気圏内にすでにあったのです。同様に、太陽においては、月上ではじめて組み入れられるアストラル体が周囲にありました。古い太陽を次のように表象することができます。太陽は今日の地球のような岩石、植物、動物から成り立っているのではなく、太陽上に存在していたのは二つの自然領域でした。太陽上に見いだせる存在、人間は、どうにか人間的な植物といったところで、こうした存在とともに、古い太陽上には、一種の鉱物もありました。けれどもこの古い太陽を現在の太陽と混同してはなりません。古い太陽は厚い流動するアストラル的な外被に取り巻かれていました。古い太陽はいわば、アストラル的な空気の覆いに囲まれていて、このアストラル外被は光輝いてい

ました。古い太陽上の舞台はこんなぐあいだったのです。

今度は再び、物質体、エーテル体、アストラル体と自我を有する今日の人間を考察してみましょう。さてこの自我がアストラル体へと働きかけて、これをよりいっそう知的、道徳的、靈的な関連において浄化すると、このアストラル体から靈我ないしマナスが生じます。はるかな未来、今日ほとんど始まっていないこのことが完了されたときには、このアストラル体が「物質的に」輝きを発することでしょう。植物がすでに自らの内に新しい生命の萌芽を宿しているように、アストラル体もすでに光の萌芽を宿しています。いつか人間が自らのアストラル体をもっともっと純化し、浄化しきったあかつきには、この萌芽が宇宙空間へと光を発することでしょう。この地球は、別の惑星へと変容するでしょう。今日の地球自体は暗いのです。外部から観察することができたとしたら、地球はただ太陽の光を反射して明るく見えるだけだということがわかります。けれども、いつか地球自体が光輝くようになるでしょう。そのときには、自らのアストラル体全体を変化させてしまっている人間によって光輝くのです。すべてのアストラル体の総計が光となって、宇宙空間に光を放つことでしょう。

古い太陽の場合もそのような状態でした。古い太陽の住人は、現在の人間たちよりも高次の存在たちで、これらの存在は光輝くアストラル体を持っていました。聖書において非常に正確に光の靈あるいはエロヒムと呼ばれたこれらの存在は、そのアストラル本性を宇宙空間に放射していたのです。

さて、人間が自らのアストラル体に組み入れたものは何なのか、と問うならば、答えは、それは私たちが善、聡明さと呼ぶものだ、それを通して人間は自らのアストラル体を高貴にする、ということです。私たちがまだ食人種の段階にあり、すべての激情に盲目的に従う未開の人を観察するとき、そしてその人は何によって高度に進化した人間と区別されるのかと問うとき、こう言わざるを得ません、文明人はすでに自らのアストラル体に働きかけてきたが、未開の人はまだそうしていないという点で区別される、と。自らの激情や衝動を、これには従ってよい、別のはいけないと自らに言い聞かせるほどに把握している人は、道徳的な概念や理念を形成しています。つまりこれがアストラル体を変化させ高貴にするということなのです。人間は受肉を重ねつつアストラル体に働きかけることにより、ますますいっそう前述の光輝く存在へと自らを高めていきます。これは《叡智の働きかけ》と呼ばれます。アストラル体の中に叡智が増せば増すほどアストラル体は光輝を増します。あの太陽上に住んだ存在、エロヒムたちは全き叡智に貫かれていました。私たちの魂と肉体との関係は、ちょうどこの光と叡智の関係なのです。光と叡智の関係は考案されたイメージではないということがお分かりいただけたでしょう、これはひとつの事実に基づいており、ひとつの真実なのです。光は事実叡智の身体なのです。こうして私たちは、宗教的な古文献が光について叡智の形象化として語っていることを理解できるようになります。

学びつつある人、高次の視力、靈視力を発達させつつある人にとって、たとえば次のような修行をすることは大きな意味があります。すなわち、真っ暗な空間に身を置き、外からの光を完全に遮断して - - 夜の暗闇であっても両目を閉じることでよいのですが - -、それから徐々に自分自身の内的な力によって、光の表象に突き進もうとするのです。人間がその表象を十分な強度をもって形成できるようになると、その人は次第に明敏になり、そして光を見るようになります、それは物質的な光ではありません、その人が今や自ら創造し、内的な力によって自らの内に生み出した力です。これは叡智に貫かれた光です、この光の中で人間には創造する叡智が現れます。これがアストラル光と呼ばれる光なのです。瞑想を通じて人間は内的な光を生み出すことができるようになります。この光は、人間がいつの日か - - 物質的な目ではなく、もっと精妙な感覚器官によって - - 見るであろうものの先触れなのです。それはエロヒムたちのような実際に存在する靈存在たちの衣装となります。人間がこの修行を正しいやり方で行うと、それはこれらの高次存在と関係を結ぶ手段となります。自らの経験から靈的世界について何かを知るひとたちは、このようなことを行なってきたのです。

後でお話しします別の方法によって人間は、自らの内的な力により、空間が光に照らされ、叡智に取り巻かれるのみならず、空間がいわば音を発し始めるという事態にまで到達することができます。ご存知のように、古代ピタゴラス哲学では、天球の音楽について語られていました。この《天球》という言葉で、ここでは宇宙空間、つまり星々が運行する空間が意味されています。これはあれこれ考えたあげく作り上げられたイメージなどではなく、詩的な比喻でもない、ひとつの真実なのです。人間が秘密の導師の指示に従って十分に修行を積むと、明澄な、光輝に満たされた空間、叡智の顕現である空間を内的に観るだけでなく、宇宙空間にみなぎる天球の音楽を聞き取ることを学びます。空間が鳴り響き始めるこの時、人間

は天上的な世界、デヴァチャンにあると言われるのです。まさしく空間が鳴り響くのですが、これは物質的な音ではありません、これは霊的な音、空気中では生きるのではなく、ずっと高次の精妙な実質、アーカーシャ実質の中に生きる音なのです。空間は絶え間なくこのような音楽に満たされています、そしてこの天球の中にある種の基調音があるのです。

さて、ここでもう一度天球の音楽というものにおいて理解したことを考察してみましょう。今日の数学的天文学者たちが、神秘学において惑星について語られていることを明らかな妄想と見なすであろうことは、私にはよく分かっております。けれどもそれは問題ではありません、やはりこれは真実なのでありますから。

お話ししてきましたように、この地球はだんだんと進化してきました、私たちは地球の諸々の受肉について語ってきたのです。地球は最初、土星、それから太陽、さらには月、そして現在は地球であり、後に木星、金星、ヴルカンとなっていきます。さて、皆さんは次のように問うことができます、そうは言っても今も空に土星というものがあるではないか、この今日の土星は地球の最初の受肉状態であった土星とどういう関係にあるのか、と。今日、星空を観察すると、私たちが公によく知っている諸惑星が見えます。これらの惑星の名称は恣意的に選ばれた、つまり近年、慣例になっているように、特定の人物、例えばその星の発見者の名前にちなんでつけられたというようなものではありません、そうではなく、星々の本質に関する深遠な知から与えられた意味深い名前なのです。今日人々はもはやそのようなこととは関わりなく、例えばウラヌス（天王星）は後になってはじめて発見されたためこのような正しい名前を持っておりません。今日皆さんが天に土星として観ているものは、私たちの地球がまだ土星の状態にあったときと同じ段階にあるのです。公の土星は地球に対していわば少年が老人に対するような関係にあります。老人がそのかたわらに立つ少年から育ってきたのではないように - - 老人自身かつては少年だったわけですから - - 、この地球も今日ある土星から進化してきたものではありません。今日空にある土星もまたいつか《地球》となってゆくのであり、現在は一種の青年期の段階にあるわけです。他の天体の場合もこれと同様です。太陽はかつて地球がそうであったような天体ですが、ただそれがいわば《前進した》[avanciert]状態なのです。人間の場合に、老人のかたわらに少年がいるといった具合にさまざまな年齢層がともにあるように、天においてもさまざまな惑星がさまざまな進化段階にあって並存しているのです、その一部は、現在その第四の受肉状態にあるこの地球がすでに完了した進化段階であり、また一部はこれからとることになる進化段階です。これらの惑星は、お互い正確に一定の関係にあります。神秘学者はこうした関係を今日の天文学者が行うのとは別のやり方で表現するのです。

ご存知のように、諸惑星は一定の速度で太陽の回りを運動しております。けれどもこれらの惑星は神秘的な天文学者たちによって精確に探求されている惑星運動でもある、また別の運動もしているのです。その探求によって明らかにされたのは、太陽はある霊的な中心点の回りを運動しており、従って諸惑星の軌道はその正中線が太陽の軌道となる螺旋を描くということです。各惑星がその軌道を運行する速度は、お互いに全く一定の調和した比例関係にあり、この音響としての比例関係が聞く者にとって、ひとつのシンフォニーへと構成されるのです。これがピタゴラス学徒によって天球の音楽とみなされていたのです。この共鳴、この音楽は、宇宙的な出来事の模像であり、ピタゴラスの学院で教授されたものは、何ら頭をひねって考案されたものではないのです。古代の神秘学的天文学者たちはこう語りました。一見静止しているように見えるこの星天は実際は動いている。霊的な中心点の回りを、百年ごとに一度ほど前にずれていく速度で回転しているのだ、と。

さて、各惑星の速度は、お互い次のような関係になっています（編集者註 1）。

土星の速度 = 木星の速度の 2 1/2 倍

木星の速度 = 火星の速度の 5 倍

火星の速度 = 太陽、水星、金星の速度の 2 倍

太陽の速度 = 月の速度の 1 2 倍

この場合、土星の速度は金星天の速度より 1 2 0 0 倍早く、年に 1 2 度前進します。

物理学上の音楽的調和が成立するとき、これは、例えばさまざまな弦が、あるものは速く、あるものは遅く、異なって振動することに基づいています。一本一本の弦が振動する速度に従って、高い音や低い音が響き、こうしたさまざまな音の共鳴が音楽として鳴り、調和を生むわけです。皆さんが弦の振動から、

この物理学的なものの中に、音楽的印象を得ると全く同じように、デヴァチャン界の靈聴の段階にまで上昇した人は、天体の運動を天球の音楽として聴き取るのです。さらに、諸惑星のそれぞれ異なる運動速度の比例関係により、宇宙空間全体に響きわたる天球のハーモニーの基調音が生じます。ピタゴラスの学院では、まさしく天球の音楽について語られているのであり、それは靈的な耳で聞くことができるのです。

以上の考察から、私たちはさらにまた別の現象も暗示できます。例えば、薄い真鍮板に微細な粉末をできるだけ均等にまき散らし、ヴァイオリンの弓でこの板をこするとします、すると音が聞こえるばかりでなく、粉末の粒子が一定の線上にきちんと並びます。音に応じてあらゆる図形が形成されます。音が作用して物質、素材が配置されるのです。これが有名なクラドニの音響図形です。

靈的な音が宇宙空間を貫いて響いたとき、音は互いに比例関係にある諸惑星を天球のハーモニーへと組織しました。宇宙空間に広がって見えるものを、この創造する神性の音が配列させるのです。このような音が、宇宙空間の内部へと響きわたったことにより、物質が、ひとつの系へと、太陽系、惑星系へと形成されたのです。ですから《天球の音楽》という表現も、才気あふれる比喩などではありません、それは現にある事実なのです。

さて、また別のことがらに移りましょう。この地球が常に現在のようであったわけではないことはお分かりですね。相当長い間神智学に携わってきた方は、現在の受肉状態にある地球がさまざまな進化段階を経てきたことをご存知でしょう。はるかに遠い過去、地球は火で溶融したような状態でした。今日の石や金属であるものは、かつてはこの火で溶けた状態の地球に溶けこんでいました。そのような熱の中では、人間もその他の存在も生存できたはずはないという非難に対しては、次のように答えねばならないでしょう、当時の人間の肉体は当時の諸条件に適合したものであったのだ、と。当時の肉体は、今日の溶鉱炉よりも高い温度でも生存できたのです。この地球の火の時代に続いて、私たちがアトランティス時代と呼ぶ水の時代がやってきます。ちょっとこのアトランティス時代を考察してみましょう。アトランティス大陸は、今日のヨーロッパとアメリカの間の大西洋の中心に広がり、私たちの先祖が住んでいました。むろん彼らは今日の人間とは全く異なった状態にありました。彼らの視力は私たちのそれとは異なっていました、彼らはある意味で靈視を行っていたのです。アトランティス人の進化においては、この視力にさまざまな段階がありました。アトランティス末期の最終段階は、はるかに高次の段階の一種の余韻のようなものでした。例えば、アトランティス人は外的な対象をアトランティス末期になってようやく見るようになるようになったのです。それ以前、アトランティスには厚い水を含んだ大量の霧が充満していたので、対象物は空間的にはっきりとした輪郭で分けられていませんでした。こうしたアトランティス進化の初期においては、知覚のしかたが全く異なっていました。古代アトランティス人がある物や存在に近づくと、最初に見たのはある人物や対象の輪郭や骨格ではありませんでした、それどころか、外界とは何の関係もない、ある内的な魂の状態を再現するような色彩像が、彼らの内に浮かび上がったのです。色彩像は、こちらに向かってくる存在が彼にとって有益なのか危険なのかを語るものでした。例えば、こちらにやってくる者が他に対して抱いているのが復讐の感情であったなら、それに応じた色彩像が彼に示され、彼はそこから走り去りました。野生の獣が近づいたら、彼は同様に識別し、それから逃れることができたのです。アトランティス人は、自分の周囲の魂の状態をこの靈視の最終段階で知覚していました。その状態から今日の視力が徐々に発達してきたのです。非常に霧のかかった日のことを考えてみてください、対象はそういうとき、ぼやけています。考えてごらんください、こんな日には、街灯も点のように浮かび上がっているだけでしょ。それからだんだんと輪郭が判別できるようになってきます。こうして徐々にアトランティス人は見ることを学んだのです。人間が以前に見ていたものは、一種のアストラル的な色彩でした。最初のうち、この色彩はまだ自由に漂っているように見え、それからいわば事物の上に置かれたのです。

もちろん、こうした別種の知覚は、当時の人間は今日とは全く違った様相をしていたことと結びついていきます。例えば、アトランティス時代の末期には、人間の身体の額ははるかに後退して、その上方にエーテル体が大きな球のようにせりだしていました。額の後ろ側の点、両眼の間を少し後退したあたりで、物質体とエーテル体はまだ一致していませんでした。それから物質体とエーテル体が収縮し、物質体とエーテル体両者の点が一一致したのは、人間進化において、重要な瞬間でありました。今日では肉体の頭部はエーテル体の頭部にほぼぴったりと収まっています。馬の場合は、まだそうではありません。けれども人間の場合、この頭部が変化してきたように、四肢も変化してきたのです。徐々に現在の肉体の形姿が形成されてきたのです。アトランティス時代末期へと思いを馳せてみてください。そもそも当時はどんな状態

だったのでしょうか。人間はある種の霊視力で自分の周囲の魂的状态を知覚していました。もう一度この厚い霧の大気、水蒸気をたっぷり含んでずっしりと重い空気を思い浮かべてください。太陽や星々、皆さんの周囲のあらゆる対象物は当時、この厚い水を含んだ空気の中ではよく見えなかったことでしょう。虹は当時はまだありませんでした、虹はまだ生じていなかったからです。すべては厚く重い大量の霧におおわれていました。それゆえ、伝説はニヴルハイム、ネーベルハイム（霧の国）について語っているのです。徐々に、空気の中に厚く拡がっていた水が凝縮していき、「かくて大洪水の水が地上に降り注いだ」（ 2 ）。これは厚い大量の霧が水へと凝縮し、降水、雨となって落下したということを言っているのに他なりません。水が空気から分離されたことにより、空気は透明になり、それに伴って、今日のような視力が形成されてきました。人間は、自分の周囲の対象を見ることができるようになって初めて、自分自身を見ることができたのです。

さて、人間の物質体は深い意味を持つ多くの規則性を示しています。そのうちのひとつは次のようなものです。皆さんが、高さ、幅、長さが、3 : 5 : 30の割合となる箱をこしらえとします。そうすると、これと同じ割合が人間の肉体にも見出せるのです。換言すれば、これによって人間の肉体の規則的な構成の割合が示されているわけです。人間がアトランティスの洪水から出てきたその当時、人間の肉体は3 : 5 : 30という割合に従って形成されていました。このことは、聖書においては次のような言葉でたいへんみごとに表現されています、「そこで神はノアに命じて、長さは三百エレ、幅は五十エレ、高さは三十エレの箱（舟）を作らせた」（ 3 ）と。人体の調和の寸法比は、このノアの箱船の寸法比とぴったり適合しています。

神秘学の記号や形象は、事物の本質そのものから取り出されたものです、従って、それらを通じて私たちがいかにして霊界の関係をのぞき込むことができるかを示すものなのです。

第二講

シュトゥットガルト 1907年 9月14日

建築物と形式（フォルム）の人間に及ぼす作用。秘儀参入者の創造としてのゴシック建築。それは現代の人間の周囲の形式世界とは逆。アトランティスから後アトランティスへと移る人間の形態の改造とノアの箱舟の寸法比。地・存在としての蛇、水・存在としての魚、空気・存在としての蝶、熱・存在としての蜂の象徴。

昨日はノアの箱舟に言及したところで止まりましたが、この箱舟の高さ、幅、長さの比率の中に、人体の寸法の比が表現されているということがわかりました。聖書という宗教的古文献のこの箱舟がどういう意味を持つかを洞察するためには、このとおりに考察せねばなりません。私たちは単に人間を救出しようという乗り物が人体の寸法を思い起こさせる一定の寸法を取ることがどういう意味なのかを明らかにするのみでなく、あの人類進化の時代、ノアの物語に暗示されている実際の出来事が起こった時代へと沈潜することが必要でしょう。

神秘学（オカルティズム）についていくばくか理解した人々が、外界に何か対象物を見いだした時、それはいつも人間の魂にとってまったく特定の目的、まったく特定の意味がありました。ゴシックの教会と大聖堂を、中世初期に成立し西部から中央ヨーロッパに向けて広がったまったく独自のこの建築物を思い出してみてください。ゴシック教会は確固たる建築様式を持ちます。- -二つの、上に向かって先の尖った部分からなる独自のアーチが、全体に上方を切望する気分としてあふれていること、支柱が一定の形態をとっていることなどの点で表される様式です。このようなゴシック大聖堂が、単なる外的な必要性から、例えばあれやこれやのことを表現したり意味したりすべき神の家をつくらうというある種の憧れから出てきたものだと主張しようとする人はまったく誤っています。まったく違うのです。ゴシック様式の基礎になっているのは、もっとずっと深い何かなのです。ゴシック建築物のために世界に最初の理念を提示したのは、神秘学に精通した人々でした。彼らはある程度の秘儀参入者だったのです。

人類のこの偉大な指導者たちは、このような建築物、建築様式を生じさせることに、まったく特定の意図を結びつけていました。ゴシック様式、ゴシック式大聖堂と教会に足を踏み入れる人には、まったく特定の魂の印象が呼び起こされます。そびえ立つ支柱群を備えに高く湾曲したドームの中では、まるで一種の苑（もり）に踏み込んだような印象です。そこにとどまることは、魂に対して、例えばあなた方が普通の家屋やルネサンス式丸屋根やロマネスク様式の丸屋根を備えた建築物の中に入っていく時とは、まったく違った作用を及ぼします。形式からまったく特定の作用が生じてくるのです。通常の間人にはこのことは意識されず、これらすべては無意識のうちに彼の意識下に生きます。このような形式に囲まれている時、自分の魂に起こっていることを人間はあまり理解してはおりません。その時起こることは、その周囲の状況に応じて非常に異なります。人々の多くは、現代の唯物主義はこんなにも多くの唯物主義的著作が読まれていることに由来するのだと信じています。しかし神秘学者はその影響はそれほどではないということを知っています。目で見ているものの方がはるかに重要なのです。目で見るものの影響は、多かれ少なかれ無意識裡に進行する魂の経過に及ぶからです。これには、きわめて実際的な意味があります。いつか精神科学が真に魂を把握するとき、この実際的な作用が公共の生活においても目につくようになってくるでしょう。既にしばしば指摘してきたことですが、中世において通りを歩くとき、今日とはまったく違ったものがありました。左右のどの正面（ファサード）にも、その家を作り上げた人の銘が刻まれていました。どの対象物も、人々の周囲にあるものは皆、どの戸錠も、鍵も、その製作者の魂が自らの感情を体現させた何かから作り上げられていました。ひとりひとりの細工者がいかにどの部分に対しても喜びを感じていたか、いかにその中に自分の魂を注いでいたかをはっきり感じてください。どんな物の中にも、作者の魂の一部が残ったのです。従って、外的な形式の中に魂が存る所では、それを見、観察する人にも、魂の力がみなぎりました。今日の都市と比べてみてください。今日、事物のうちにまだ魂は存るのでしょうか。靴の店、刃物の店、肉屋の店、それにピアホール等があります。あのポスター芸術のみをとっても、これらはどんな成果を生むのでしょうか。ぞっとするようなポスター芸術！古いも若きも、このようなおぞましい制作物、意識下の最悪の力を呼び起こす制作物の海の中をさまよっているのです。神秘学的教育術

は、目で見るものが人間の奥深く影響を及ぼすということに注意を喚起するでしょう。それに、現代の風刺雑誌をご覧下さい。いったい何が掲載されていることが、何ら批判たろうとはせず、単に事実のほめかしにすぎません。というのも、これらはすべて、人間をある一定の方向に導く力、時代を見定める力の流れを人間の魂の中に注ぎ込んでいるのです。精神科学者は、それは人間がどういう形式の世界に生きているかによるということを知っています。

中世の半ば頃、ライン河沿いにドイツ神秘主義と呼ばれる注目すべき宗教的運動が発生しました。法外な深まりと内面化が、キリスト教神秘主義の指導的精神たち、マイスター・エックハルト、タウラー、ズーゾー、ロイスブルーク他、「坊さん方（プファッフェン）」と呼ばれた人物たちから発しました。13世紀、14世紀においては、「坊さん（プファッフェ）」という呼称は、今日とは異なり、まだいくらか尊敬の意味合いを持っていました。当時ラインは、「ヨーロッパの偉大なる坊さん横町」と呼ばれていました。それでは、この人間心情の偉大な深まりと内面化、神的な本質の諸力との親密な一体化を求めるこの敬虔な感情はどこで生み出されたのでしょうか。それは尖塔迫持（せりもち）支柱と円柱群を備えたゴシック大聖堂の中で引き出されてきたものなのです。この聖堂がこれらの魂を引き出したのです。見られたものはそれほど強力に作用するのです。人間が見るもの、人間の周囲からその魂に注ぎ込まれたもの、これが人間のうちでひとつの力になります。この力に従って、人間は - - 次の受肉に至るまで - - 自分自身を形づくのです。

ここでちょっと人間の進化からこのことを図式的に魂の前に引き出してみましよう。建築様式というものは考え出されたものではなく、ある時代に秘儀参加者たちの偉大な思考から生み出されます。彼らは建築様式を世界へ流入させるわけです。建築物が建てられ、それが人間に作用します。人間の魂はこの形式の中に生きている霊的な力を幾分か自らの内に受け入れます。建築の形式 - - たとえばゴシック式 - - を見ることによって魂が受け入れたものは、魂の気分の中に現れてきます。高みを見上げる情熱的な魂として...。数世紀前に人々はゴシック式の中に生きていたものを自らの内に受け入れました。そして今度は、これらの人々、この建築の形式の力を魂の中に受け入れた人々の数世紀後を追求してみると、彼らは今やその次の受肉において、その人相や顔貌に、この内的な心情の顕現を示しているのです。人間の魂が顔を作り上げたのです。それでこのような芸術がなぜ用いられるのかがわかります。人類の未来のずっとずっと先まで、秘儀参加者たちは見ているのです。そのため彼らはある特定の時代に、外的な芸術形式、広くは外的な建築様式を形成します。このように、人間の魂の中に、未来の人類の時代のための胚珠が蒔かれるのです。

このことを正しく目の前に置いてみると、アトランティス時代末期に起こったことも理解できるでしょう。もう一度、アトランティスの最期、没落が起こった時代に目を転じてみましよう。この時代にはまだ今日のような空気というものはありませんでした。空気の分布も水の分布もまだまったく異なっていました。濃い霧がアトランティスを取り巻いていました。霧が雲に凝縮し、流れ落ちる雨となって大洪水が陸地にあふれました。このアトランティスの沈没は、徐々に段階的であったと表象せねばなりません。短期間のうちに起こったのではなく、何千年も続くひとつの経過（プロセス）だったのです。外的な生活状況の変化にともなって人間そのものも変わりました。それ以前、人々は一種の霊視により知覚していました。それから雨が降り始めたとき、人々はしだいしだいにまったく新しい生活の仕方、新たな見方、新しい種類の知覚に慣れなければなりませんでした。人間の肉体も変化を免れませんでした。アトランティスの人々が今日の人間とどれほど異なっていたか、はっきりと見ることにでもなれば、皆さんは驚かれるでしょう。けれども、こうした変化がひとりで起こったとは考えないでください。感覚器官を備えた人間の身体は、少しずつ形成されてきたのです。人間の魂の力が長期間に渡ってこの人間の身体に働きかけ、先ほど簡単な例でお話したような仕方でも作用しなければなりませんでした。まず人間は、建築様式を見ます。それが彼の心情に作用し、さらにまたこの心情が後世において、人間の顔相、顔貌に作用するわけです。

アトランティス時代から後アトランティス時代に移行する時期になって初めて、人間の魂は自らの形を変え、それに続いて肉体も作り変えられました。もう少し深く入り込んでみましよう。正真正銘の古代アトランティス人を表象してみましよう。彼はまだ霊視的意識を有していました。このことは、生活している環境、霧に満たされた大気と関わりがありました。この環境では、事物は明確な輪郭をもって境界づけられてはいませんでした。それらはむしろ彼の前に浮かび上がってくる色彩像、色彩の波浪といったもので、入り乱れてうねりつつ、人々の魂の状態を彼に示していたのです。自分に近づいてくる対象物の代わ

りに、アトランティス人はひとつの光の形（フォルム）を知覚していました。青は愛、赤は熱情、怒りなどという具合に。彼を取り巻いて、あらゆる人間の魂の力が広がっていました。もしこういう状態がずっと続いていたとしたら、人間は決して現在の肉体を獲得できなかったでしょう。空気が水から解放され、対象がますます明るくはっきりと現れてきて、現在のような境界をなすようになったとき、人間の魂が新たな印象を受け取らねばならない時期が到来したのです。そしてこの印象に従って、魂は自らの肉体を形成しました。というも、あなた方が考えたり感じたりするものに従って、あなた方は自らの肉体を形成するからです。さて、人間の魂は、アトランティスの水の風土から救い出されて新たな空気の風土に移行したとき、肉体を今日の形に作り上げるために何を体験せねばならなかったのでしょうか。人間の魂は、後に形成されるべき肉体に合った特定の長さ、幅、深さを備えているようなひとつの形（フォルム）に囲まれていなければなりません。この形は、聖書がノアの箱舟と名づけたものによって実際に彼に与えられたのです。神秘主義の気分がゴシック式大聖堂の形から形成され、その形に従ってどんな顔貌が形成されたかを霊視者なら確認できるように、古代アトランティス人の肉体は徐々に形成し直されました。なぜなら人々は、偉大な秘儀参入者の影響の下に聖書がノアの箱舟を記述している寸法に従って建造された事物の中で、実際に生活していたからです。古代アトランティス時代の生活は、一種の水 - 海上生活でした。人々の大部分は水上の舟で生活していて、しだいに陸上での生活に慣れていったのです。というのも、古代アトランティスは単に水を含んだ霧の大気に囲まれていたのみならず、アトランティスの大部分は海に覆われていたからです。人々は肉体を今日のようなものに作り上げることができるよう、このような舟の内部で生活していたのです。これがノアの箱舟の秘密です。聖書から再び神秘的な深い意味を読み取ることに通暁すれば、この古文獻には、叡智と限りない崇高さの輝きがあふれるのです。人々は、自分の皮膚のなかに閉じこめられているという印象を得なければならなかったので、舟上で生活しました。このように秘儀参入者たちは、何千年にもわたって人間の育成に作用を及ぼしました。宗教的古文獻においてみなさんが出会うものは、まさしく深く秘された真実から取り出されたものなのです。

また別の形象が聖書の第一章に見いだせます。今世紀の蛇の形象です。ローマの地下納骨堂（カタコムブ）ではさまざまな魚の徴（しるし）が見られます。この魚は古来、常に繰り返し図像として、キリスト教的なものないしキリスト自身を意味するとされています。誰かがこうした形象について思索を深めようとすると、おそらく多分に才気煥発なところが発揮されるでしょうが、それは単なる思弁にすぎません。私たちは単に真実と関わりを持つとしていたのです。これらの図像もまた霊的世界から与えられたのです。皆さんが人類進化の歴史において数分間私に従ってくださいなら、これらの蛇と魚の象徴にどんな真実が含まれているかわかりになるでしょう。

今一度、地球は人間と同じくさまざまな受肉を経てきたということを思い出してください。ご存知のように、この地球は地球となる前には土星、太陽、月でした。人間の肉体はさまざまな惑星状態においてすでに存在していたのですが、自我は地球上ではじめて人間に受け入れられました。さて、この地球がまだ最初の受肉状態、つまりまだ土星であったとき、どのように見えたか観照してみることにしましょう。当時はまだ岩石や表土のようなものは存在しておりませんでした。人間の物質的肉体は存在してはありましたが、非常に精妙なものでした。それが徐々に濃密になって、ようやく現在の筋肉の形態となったのです。

今日の私たちの周囲の物質を観察してみると、個体、液体、気体といった異なった状態があることがわかります。神秘学ではすべての個体状物体が「土」と呼ばれ、「水」と称してすべての液体状の物質、「空気」ですべての気体状、ガス状のものが理解されます。「火」すなわち「熱」はこれらの状態より精妙です。今日の物理学者はむしろこのことを認めないでしょうが、神秘学者はこの「火」が実際、土、水、空気と比較されるものであり、ただこの三つよりももっと精妙な状態であるということを知っています。皆さんが熱を感じるところでは、空気よりももっと精妙な何かが存在しているのです。私たちが神秘的な意味で、土、水、空気とみなすものに関しては、土星上には何もありませんでした。これらの固定した有形の状態は、太陽、月、地球となってようやく成立したのです。土星上で最も濃密な状態は、熱あるいは「火」でした。この中に人間の体が生き、土星を取り巻く環 - - つまり土星はどれも環を有するわけです - -、これは本来反射された火の鏡像、火の分泌なのです。このことを更に詳しく述べていると、本日のテーマから遠ざかることになってしまいます。

さて、土星から太陽へと移りましょう。ここで火に空気が加わります。太陽上で最も濃密な状態は空気でした。これは一種の空気太陽だったのです。太陽上で人間は空気存在であり、その時にエーテル体が注

入されました。空気存在の他には何もありませんでした。これらの空気人間は空気のように「透過できる」存在でしたから、彼らを突き抜けていくことができたでしょう。空気人間たちは蜃気楼と比較することができでしょう。それほど彼らは軽くふわふわしていたのです。むろん、古い太陽上の空気は今日より濃密でした。古い月上でようやく水の状態が生じ、この月上で生きるものはすべて水の凝縮によって形成されました。今日でも見ることのできるクラゲや軟体動物がこうした水 - 存在についての表象を与えてくれます。当時の物質的肉体はすべてこのような性質のもので、この種の肉体のみがアストラル体を自らの内に受け取ることができたのです。進化はだんだんと先へ続いていきました。このように物事は、つまり人間と地球は関わり合っているのです。人間は自らの惑星に属しているのですから。さて今度は、この惑星進化の意味を考察してみましょう。土星上には物質体の萌芽・原基がはじめて存在しました。太陽でエーテル体が付加され、月ではアストラル体が付加されました。月上ではしかしさらに別のことも起こりました。古い月が二つの天体、すなわち一種の精妙になった古い太陽と本来の古い月という二つに分離したのです。当時、古い月上にとどまっていた人間は、基本的に今日の人間よりずっと劣った存在で、その進化段階はずっと低次のものでした。というのも、アストラル体は古い月上では荒れ狂う激情にあふれていたからです。ずっと後になって自我が付加されてからようやくアストラル体の浄化が始まりました。

そのためにはさらなる進化が必要でした。つまり、月が再び太陽と合体し、古い月と太陽という二つの天体が再びひとつにならねばなりませんでした。[筆記に欠落] 分離した太陽上に生きていた高次の存在たちは、彼ら自身の進化を続けることができるためには、月から離れねばなりませんでした。けれども今度は、この月上に残された存在、そこでさらに固化してしまった存在を救済せねばならなくなり、それで太陽は再び月と一体化せねばなりませんでした。

さて、ひとつ問いを出してみましょう。もし太陽と月とが再びひとつにならなかったとしたら、両者が別々に進化を続けていたとしたら、どんなことが起こっていたでしょうか。その時は、人間は決して今日のような形態を保つことができなかつたことでしょうか。古い月が自らの道を単独で進んでいったとしたら、つまり、太陽との合一によって新たな力を創造することができなかつたとしたら、月が生み出すことができたであろう最高の存在は、おそらく今日の蛇のようなものであったでしょう。それに対して、太陽存在は - - 彼らが単独のままだったとすれば - 最高のものとして魚の形態に到達することができたでしょう。魚の形態は、人間よりずっと高度に進化した存在たちの外的な現れなのです。魚の集合魂は、実際今日でもとても高度なものです。外的な形態は魂とはまったく別のものなのです。それでは古い月の存在たちを蛇よりも高める力はどこからやってきたのでしょうか。この力は、太陽の存在たちから彼らのもとへやってきました。この高次の存在たちの太陽状態の清澄さが魚の形態の中に表現されています。それは古い太陽存在たちが獲得できる最高の物質的形態であるからです。

それで太陽の力のすべてを地球に受け付けた太陽の英雄、キリストは、魚の徴（しるし）によって象徴されるわけです。どんな深い直観をもって秘教的キリスト教が魚の形態の意味をとらえたか、今や皆さんにはご理解いただけると思います。魚の形態は秘教的キリスト教にとって、太陽の力、キリストの力の外的な表徴なのです。なるほど魚は外的には不完全な存在ですが、魚はそれほど深く物質の中に入り込んでいないので、利己主義に満たされることが少なくてすむのです。

神秘学者にとって蛇は、古い月から進化した地球の象徴です。一方、魚は古い太陽の霊存在たちの象徴です。固体的実質を備えた私たちの地球は、蛇の中にそのもっとも深い存在、地球存在を象徴化しました。水の実質として分離されたものは、魚の中に象徴として示されています。神秘学者にとって魚は水から生まれたもののように思われます。さて、それでは空気から生まれたもの、火から生まれたものとは何でしょうか。これは追求していくのが困難な分野です。ここではいくつか暗示的なこととお話するだけにとどめておきます。

地球がまさに土星状態から太陽状態へと進化して移行した当時は、どのように見えたのでしょうか？人間は一種の空気人間でした。今日の意味での死というものを人間はまだ知りませんでした。人間は自らを変態させていたのです。人間がどのようにして今日のような死についての意識に行き着いたのか、ちょっと図を描いてはつきりさせてみましょう。地球が土星状態から太陽状態へと進化していった時、人間の魂はまだ太陽を取り巻いている気圏内で生きていたのですが、下方に肉体として存在していたものとの関わりを持っていました。今日において、夜眠っている間、アストラル体は物質体から抜け出てはいても、物質体に属しているように、古い太陽と古い太陽上においても、アストラル体はそのような状態でした。ただ、

当時においては魂は決して物質体の中に入り込むことはありませんでした。靈的な意識をもったひとつの魂がなるほど特定の肉体にすでに属してはいましたが、外から肉体を管理していたのです。それはこのように表象せなばなりません。

魂は<外的なもの>だったのです。この肉体はまだ死の法則に属してはいませんでした。成長と死滅は今日の場合とは違う形で起こっていました。肉体がある部分を失うと、新しい部分が再生されたのです。今日たとえば空腹と食物が関わっているように、物質体の崩壊と再生とのこのような関係が生じました。長期にわたって魂が生き続ける一方で、肉体は変化していきました。当時は、いかなる死もありませんでした。こうして太陽状態のある時点から、人間の魂がある特定の肉体をまず形成し、それからその肉体をさらに別のさまざまな形に作り変えていくようになったのです。最初にある一定の形の肉体が形成され、それから魂がこの形を別の形に変化させ、さらに別の形に、それから第四の形に...という具合に続いていき、再び最初の状態に戻りました。人間はその間ずっと同じ意識を保持していました。形は変化を重ね、人間の魂が二つの状態を体験した後に、最初の形に戻った時、魂は新たに受肉したように感じたのでした。このような進化の過程は蝶において保持されているのがおわかりでしょう。蝶は、卵、幼虫、蛹、蝶という形で変態しています。蝶は、古い太陽上での、空気状態の人間を表す象形文字、記号なのです。まったく変化してしまった環境に生きている今日の蝶は、むろんこの太陽状態の衰退した形です。蝶は、人間が乗り越えてきた空気状態の象徴なのです。ですから、蝶は、神秘学においては、空気 - 存在と呼ばれるのです。同様に、蛇は土 - 存在、魚は水 - 存在と呼ばれます。鳥が空気 - 存在と呼ばれない理由は、後ほどもう一度述べようと思います。

さて、最初の土星状態まで戻りましょう。この時、人間は靈的 - 魂的存在であって、総じて同じ肉体を持ち、低次の段階で自らの不死を知り、その肉体を絶えず変化させていました。こういう状態も、ある存在の中になお保持されています。その共同生活は非常に独特で、これを集合魂とみなしますと、ある意味で人間よりずっと高次の存在といえます。つまり、蜂のことです。蜂の巣全体は個々の蜂とは違うとみなされねばなりません。蜂の巣 - - 個々の蜂ではなく - - は、ひとつの靈的な本性を持っています。これはある意味でかつての土星における低次の段階での人間の本性と一致するのですが、人間は金星状態において、高次の段階で再びこの本性に到達することになります。蜂の体は、古い土星段階にとどまったのです。私たちは蜂の巣と個々の蜂とをよく区別しなければなりません。蜂の巣の魂は通常の集合魂ではなく、それ自体特別な存在です。個々の蜂は、形態の中に、人間の肉体が土星で行ったようなことを保管したのです。蜂の巣の靈は、個々の人間の靈よりも高次のもので、今日すでに金星 - 意識を有しています。蜂は死すべき運命について何も知らない靈人の象徴なのです。この惑星がまだ火のような状態 [土星] であった時に有していた靈性に、人間はこの惑星が金星となって再び火のようなになる時、高次の段階でもう一度到達するでしょう。それゆ、神秘学では蜂を熱 - 存在あるいは火 - 存在と呼ぶのです。

自然科学があまり多くを語れない平行現象を追求するのは大変興味深いことです。いったい今日の人間は土星状態から自らの中に何を受け継いだのでしょうか。熱です！血液の温かさです。当時土星全体に分布されていたもの、つまり熱が解き放たれ、今日の人間と動物の温血を形成したのです。蜂の巣の温度を調べてみれば、それが人間の血液とほぼ同じ温度であることがおわかりになるでしょう。つまり、蜂の巣の全体が、人間の血液の温度に相応してこれと同じ進化段階に戻るような温度を展開しているのです。そういうわけで、神秘学者は蜂を熱から生まれたもの、熱 - 存在と呼ぶのです。同様に、蝶を空気から生まれたもの、空気 - 存在と呼び、魚を水 - 存在と、蛇を土 - 存在と呼びます。

以上のような言及からも神秘学的象徴や記号が表現しようとするものが、いかに深く惑星と人間の進化史と関わり合っているかおわかりになると思います。

第三講

シュトゥットガルト 1907年 9月15日

数の象徴論。分割不可能な神性の像としての1。開示の数としての2、3。自然と歴史の例のなかに見られる退化と進化 - 無からの創造。神的なものと開示的なものを結びつけるものとしての三性。宇宙あるいは創造の記号としての4。悪の数としての5。人間の本性の第五の構成要素の進化とともに、人間は独立と自由を得る。しかし、同時に悪をなす可能性も得る。人間の病気と生涯に関連する5の数の意味。完全数としての7。ピュタゴラスの意味における一性の分割不可能性。

今日取り上げてみようと思いますのは、数の象徴学と呼ばれているものについての考察です。神秘学の記号や象徴について語る時、数の中に表されている形象について、簡単ではあっても言及しておかなくてはなりません。

一昨日お話ししたことを思い出してください。宇宙における数の関係、各惑星が運行する速度についてお話ししました。数と数の関係は宇宙空間を貫いて波打つ天球の調和（ハーモニー）の中に表現されていること、それらは宇宙全体と宇宙の考察にとってある特定の意味を持っていることを見てきました。

さて今日は、もっと内密な数の象徴学を取り上げてみましょう。もっとも、真にこの象徴学に沈潜するには、もっと細心に取り扱うべきことがまだ他にたくさん必要となりますので、ここではその意味を軽くなぞることができるだけですが…。ともかくも、例えば古代のピュタゴラスの秘教学院で宇宙への洞察力を得るためには、数と数の性質に沈潜せねばならないと言われた時、少なくともこれが意味することについて見当はつくだろうと思います。数について熟考すべきだということ、味もそっけもないように思われる方もおられるかもしれません。とりわけ、現代の唯物主義的教養に毒された人々にとって、数の考察によって事物の本質に関する何かを探求できるなどということは児戯にも等しいと思われています。しかしながら、偉大なピュタゴラスが、数の性質について知ることは事物の奥深い本質へと導く、と弟子たちに語ったことには、深い根拠があるのです。ただ、1ないし3ないし7といった数について熟考すれば十分であると考えるではありません。真の秘学の教えは、魔法やおまじないなどではなく、何らかの数の意味についての迷信でもありません。その知恵はもっとずっと深い事柄に基づいているのですから。今日皆さんに受け取っていただきたい簡単な概略からおわかりになるとおもいますが、正しく数に沈潜する手がかりを持つなら、数は瞑想とも呼ばれる沈潜のためのひとつの拠り所を与えてくれるものなのです。

まず1という数、合一の数から始めなければなりません。この1という数が私が申し上げますことをどれほど真に形象化しているかは、後ほど他の代数を考察する際にもっと明らかになるでしょう。あらゆる神秘学（オカルティズム）において、常に1という数により宇宙における神の分離できない元素が表されました。1で神が表されるのです。けれども、単に数としての1に沈潜すれば世界認識のために何らかのものを獲得できると考えるではありません。どのようにしてこのような沈潜が起こるべきかわかりになると思います。でも、まずはその他の数に移った方がずっと実り多い考察になるでしょう。

神秘学では2は開示の数と呼ばれます。2という数でいわば私たちは両足の下に何か基盤を得るのですが、一方、1という数の場合、まだ基盤のないまま手探りで探し回っている状態です。私たちが2は開示の数であると言う時、これは、私たちが世界で出会うもの、ある意味で隠されたものではなく世界へ現れ出たもの、これらすべては何らかの形で二元性の状態であるということに他なりません。

皆さんは自然の中のいたるところに、2という数が広がっているのを見いだされることでしょう。いかなるものも2という数に触れることなしには自らを開示するということではできません。光も決してそれ自身だけで一元的に自らを開示することはできません。光が開示される時、影あるいは闇もそのそばになければなりません。つまり、二元性が存在せねばならないのです。開示された光に満ちた世界というものは、もしそれに相応する影がないとしたら、決して存在することはできないでしょう。これはすべてのものごとにあてはまります。善は、その影としての悪を持たないなら決して自らを開示することはできないでしょう。善と悪の二元性は開示された世界の中では必然的なものです。このような二元性は無限に存在します。二元性は世界全体を満たしています。ただ、私たちがそれを正しい場所に探さなくてはなりません。

人間が生きていく中でたびたび考慮することのできる重要な二元性は次のようなものです。昨日私たち

は人間が今日の地球の住人となる前に経てきたさまざまな状態を考察いたしました。人間は土星と太陽ではある種の不死性を保っていて、自らの肉体を外から管理し、肉体の一部がくずれ落ちると新たな部分が再び付与されたため、人間は死や消滅については何も感ずることがなかったわけです。人間の意識は当時、今日の意識とは違って、おぼろげな夢うつつの意識でした。この地球になってはじめて、人間は自己意識と結びついた意識を獲得したのです。ここではじめて人間は自己自身について何かを知り、対象から自分を区別できる存在となったのです。そのためには、単に外から肉体を管理するだけでなく、この肉体の中に - - 交互に - - 入り込んで、自らの内で「自我」が語りかけるのを感じとらねばなりません。人間はその肉体に完全に入り込むことによってのみ、完全な意識を獲得できたのです。そして、今や人間はこの肉体と運命を共有します。以前、まだ上方にいた時、人間はこういうことはしませんでした。人間がこの程度の意識を獲得したことによってはじめて、彼は死と関係を結ぶようになったのです。肉体が崩壊する瞬間、人間は自分の自我が停止するようになります。自我と肉体を同一視してきたからです。少しずつ霊的な進化を経てようやく、人間は再び太古の不死性を取り戻します。肉体は意識して不死性を獲得するための修行場として存在するのです。人間が死によって不死性をあがなわないなら、生と死の二元性を認識しないなら、決して高次の段階で不死性を獲得することはできません。人間が死を知らなかった間、まだ世界は人間に開示されませんでした。生と死の二元性は開示された世界に属することだからです。このように至る所に生における二元性を指摘することができるでしょう。物理学におけるプラスとマイナスの電流、磁気における引力と反発力など、すべては二元性の中に現れています。2は現象の数、開示の数なのです。

けれども背後で神的なものが働くことなしには、いかなる開示も存在しません。従って、どんな二元性の背後にも一元性が隠されているのです。3という数は、それゆえ2と1、つまり開示とその背後に存する神性に他なりません。1は神の一元性の数、3は自らを開示する神性の数です。神秘学（オカルティズム）には次のような原則があります。2は決して神性を表す数ではあり得ない、というものです。1は神的なものを表す数、そして3は神的なものを表す数です。というのも、神的なものが自らを開示するとき、それは2において顕現し、その背後に1があるからです。世界を二元性において見る人は、世界を顕現において見ているのです。ですから、外的な諸現象においては二元性が存在すると言う人は正しいのです。しかしながら、この二元性がすべてであると言う人は、常に正しくありません。このことを少し例を挙げて明らかにしてみましょう。

神智学の話題となっているところでさえ、「2という数は単に顕現の数であって、充溢の完全性の数ではない」という、この真の神秘学（オカルティズム）の原則はしばしば守られてはおりません。この原則を本当には知らない人々による通俗的オカルティズムにおいて、しばしば皆さんは、進化発展はすべて退化と進化の中で起こると言われているのを耳にされると思います。これは本当はどういうことなのかおわかりになるでしょう。けれども、まずは進化と退化とはどういう意味なのかを少し調べておきたいと思います。ひとつ植物を観察してみましょう。根、葉、茎、花、実、要するに植物が持つことのできる部分をすべて備えた完全に成長した植物です。これがひとつです。今度は小さな種子、植物が再び生えてくる種子を観察してください。種を見つめる人は小さな粒を見ているだけですが、この小さな粒の中にはすでに植物全体が含まれています。いわば粒の中に閉じこめられているのです。なぜその中に入っているのでしょうか。種子は植物から取られたから、植物はその力のすべてを種子の中に注ぎ込んだからです。ですから神秘学（オカルティズム）においては、この二つの過程、つまり、ひとつは、種子がほどけていって植物全体へと展開する - 「進化」と、もうひとつは、植物が収縮しその形態がいわば種子の中にもぐりこむ - 「退化」とが区別されるのです。従って、たくさんの器官を持つ存在が、これらの器官のどれもはや見えなくなり小さな部分に萎縮してしまうように自らを形成するなら、これは退化と呼ばれ、分岐すること、自己展開することは進化と呼ばれるのです。生命においては、至る所にこの二元性が交替しています。けれども、常に顕現においてのみそうなのです。単に植物の場合のみ、このことを追求できるのではなく、生のより高次の領域においても事情は変わりません。

例えばアウグスティヌスから中世を経てカルヴァンに至るヨーロッパの精神生活の発展を思い浮かべて追求してみてください。この時代の精神生活に視線を漂わせてみるなら、アウグスティヌスの場合ですらある種の神秘的な親密さを見いだせるでしょう。この人物の感情生活がいかに深く親密であったか感じることなしに、誰も彼の著作、とりわけ「告白」を読むことはないでしょう。さらに時代を辿っていきま

すと、スコトゥス・エウリゲナのような驚くべき現象を見いだします。彼はスコットランド出身の修道士で、そのためスコットランドのヨハネスと呼ばれ、カール禿頭王の宮殿で生活していました。彼は不幸なことに教会で切りつけられました。伝説の語るところによれば、修道士仲間たちが彼を留め針で死に至るまで拷問したということです。これはむろん言葉通りには受け取れませんが、彼が拷問により殺されたことは事実です。すばらしい書物が彼によって著されました。「デ・デヴィジオーネ・ナトゥラエ」、すなわち「自然の区分について」で、これは途方もない深みを示している書物です。さらに私たちは、いわゆるドイツの坊さん横町、ここではこの親密な感情が民衆全体をとらえたのですが、この坊さん横町の神秘家たちを見いだします。彼らは、単に精神性の頂点にある人々であつたばかりではなく、民衆でもありました。畑や鍛冶場で働いていた人々、彼らは皆、このように時代の傾向として生きていたあの親密な感情にとらえられていたのです。さらに私たちは1400年から1464年に生きたニコラウス・クザーヌスを見いだします。このように私たちは中世の末期まで時代をたどることができますが、至る所にその環境全体に広がっているあの深い感情、あの親密さが見いだされるのです。この時代を、後のこれに替わる時代、つまり16世紀に始まり現代にまで入り込んでいる時代とを比較してみるなら、決定的な相違に気づきます。出発点に、包括的な思考により精神生活の革新を引き起こしたコペルニクスが立っています。彼はこの思考が人類と一体化するほど注ぎ込んだので、今日、別のことを信じている人は馬鹿者とみなされるのです。それからガリレオ、彼はピサで教会のランプの揺れから振り子の法則を発見します。このように一步一步時代の経過をたどっていきますと、至る所に中世との厳しい対立が見いだせるでしょう。感情はどんどん衰えていき、親密さが消えていきます。知性、理知がしだいに現れ出てきて、人間はますます利口に、分別的になっていきます。このように、まったく正反対の性格を持つ二つの時代が前後して続くのです。精神科学は私たちにこの二つの時代の説明を与えてくれます。これは、そのようにならなければならないという神秘学（オカルト）の法則があるのです。アウグスティヌスからカルヴァンまでの時代においては、神秘主義の進化と理知の退化という時期であり、その後私たちは理知の進化と神秘主義の退化の時代に生きているのです。これはどういうことなのでしょう？アウグスティヌスから16世紀までは神秘的生の外的な展開の時代であり、それは外に現れていました。けれどもその当時、別のものも萌芽として存在していたのです。つまり、理知的生の萌芽があつたのです。これは、いわば種子のように霊的な地中に隠されていて16世紀以降少しずつ展開していくのです。このように理知的生は、当時ちょうど植物が種子の中にあるように退化（内展）の状態だったのです。宇宙においては、このような退化（内展）の状態が前もって存在しなければ何も生じてくることはできません。16世紀以来、理知が進化（外展）の状態となり、神秘的生は退いて退化（内展）の状態となります。そして今や、この神秘的生が再び現れて来なければならない時代が到来しました。神智学運動によってそれは再び展開と進化へと導かれねばなりません。

このように、生の至る所で進化と退化が顕現して交替しています。けれどもそこにとどまる人は、ただ外面だけを見ているのです。全体を見ようとするなら、この両者の背後にある第三のものをさらにつけ加えねばなりません。この第三のものとは何でしょうか？今あなた方が外界の現象に向かって立ち、それについて思索すると考えてみてください。あなた方が存在します。外界が存在します。そしてあなた方の中に思考が生じます。この思考は以前には存在していませんでした。たとえばあなた方が薔薇について思考を形成する時、この思考はあなた方が薔薇と関係を結ぶ瞬間に初めて生じるのです。あなた方が存在し薔薇が存在していました。そして今、あなた方の中に薔薇についての思考、薔薇の像が現れてくる時、何かまったく新しいもの、まだ存在していなかったものが生じるのです。これは生の他の領域でも同様です。創造しているミケランジェロのことを思い浮かべてみてください。ミケランジェロは、実際ほとんどモデルを使って製作したことはありませんでした。けれどもちょっと彼が一群のモデルを集めたと想像してみてください。ミケランジェロが存在し、モデルたちが存在していました。けれどもミケランジェロがこのモデルの一群から魂の中に得た像、この像は新しいものなのです。これは完全に新たな創造なのです。これは進化及び退化とは何の関係もありません。これは受け入れることのできる存在と与えることのできる存在との交流から生まれた完全に新しいものなのです。このような新たな創造は、常に存在と存在との交通を通して生まれます。昨日、ここで考察したことを思い出してください。思考がいかに創造的で魂を気高くすることができ、後には肉体の形成にも働きかけるのだということ。ある存在が一度考えたこと、思考創造、表象創造は働き続け、作用を及ぼし続けるのです。それは新たな創造であると同時に始まりであり、しかも結果を導きます。今日皆さんがよい考えを持つなら、この考えは遠い将来実りを結びます。

皆さんの魂は靈的世界で独自の道を歩むからです。皆さんの肉体は再び元素に帰り崩壊します。けれども、思考を生み出したすべてのものが崩壊しても、思考の作用は残り、思考は働き続けるのです。もう一度ミケランジェロの例を取り上げましょう。彼の卓越しに絵画は何百人もの人々を高揚させてきました。しかし、これらの絵画もいつかは塵となって崩れ、もはや彼の創作物をまったく見るできない世代も出てくることでしょう。ミケランジェロの絵画が外的な形態を取る前に、彼の魂のうちに生きていたもの、まず最初に新たな創造物として彼の魂のうちにあったもの、これは生き続け、存続します。そして、未来の進化段階に出現し、形を得るでしょう。どうして今日、雲や星が私たちに現れてくるのかおわかりでしょうか。なぜなら、太古の昔に雲や星を思考していた存在がいたからです。すべては思考・創造活動から生まれ、思考は新たな創造なのです。思考からすべてが生まれ、宇宙の偉大なものは神性の思考から出現したのです。

ここで私たちは第三のものを得るのです。顕現性においては事物は進化と退化の間を交替しています。けれども、その背後に第三のもの、初めて充溢を与えるもの、無から生じた完全に新たな創造たる創造が深く秘されているのです。このように三つが互いに関係しています。無からの創造があり、それからこれが顕現して、時の中で経過していくとき、顕現における形、つまり進化と退化という形をとるのです。

ある宗教的な体系が、宇宙は無から創造されたということについて語る時、それは以上のような意味なのです。今日、それが嘲笑されるなら、それは人々がこれらの古文献にあることを理解してないからです。顕現においては - - もう一度まとめてみますと - - すべては進化と退化の間を交替しています。その根底には、無からの創造が秘されていて、この二元性と一致して三元性となるのです。三元性は、神的なものと顕現との結びつきです。

さて、このように、3という数についてどのように考えられるかおわかりになったと思います。ただ、ペダンティックに理屈をこね回してはいけません。至る所で出会う二元性の背後に、三元性を探さなくてはなりません。2の背後に3を求める時、ピュタゴラス的な意味における正しい仕方で、数の象徴が考察されるのです。すべての二元性のために、隠された第三のものが見いだされ得るのです。

今度は4という数です。4は宇宙(コスモス)ないし創造の記号です。すでに以前お話したことですが、私たちの地球は - - 追求しうる限りで - - 第四の受肉状態であるということをお出しただけならば、なぜ4が創造の数と呼ばれるのか、ご理解いただけたと思います。この地球上で私たちが出会うすべてのもの、人間における第四の原理も、この創造がその惑星進化の第四の状態にあるということを前提にしています。これは出現しつつある創造のひとつの特別な例にすぎません。いかなる創造も四元性の記号の下にあります。神秘学(オカルティズム)において、「人間は今日鉱物界にある」と言われています。これはどういう意味なのでしょう? 今日人間は鉱物界だけを理解していて、鉱物界だけしか支配できないのです。人間は、鉱物的なものを組み合わせて家を建てたり時計を作り上げたりできますが、それはこれらのものが鉱物的世界の法則に従っているからです。例えば、人間は自らの思索から植物を形成することはできません。それができるためには、彼自身が植物界にいななければならないのです。いつか後になってそうなるでしょうけれども、今日、人間は鉱物界における創造者なのです。この鉱物界には、三つの元素界と呼ばれる三つの領域が先行しています。鉱物界は第四の領域なのです。全体としては、このような七つの自然領域があります。人間は今日その第四の領域にいて、そこで外へ向かう自分の意識を獲得したのです。月では、人間はまだ第三の元素界、太陽では第二の、土星では第一の元素界で活動していました。木星上で人間は植物界で活動しているようになり、今日時計を作るのと同じように植物を創造することができるようになるでしょう。創造において可視的に現れたものはすべて4という記号(しるし)のものにあり、皆さんが肉眼では見ることでできない惑星も数多くあります。これらの第一、第二、第三の元素界にある惑星は物質的な眼では見えないのです。惑星が第四の領域、つまり鉱物界に入った時はじめて、皆さんはそれを見ることができるのです。それゆえ4は宇宙(コスモス)ないし創造の数なのです。第四の状態に入ることではじめて存在は目に見えるようになり、外的なものを見ることができるようになります。

5は悪の数です。再び人間を考察すると、このことを一番はっきりさせることができます。人間は四元性へと、創造性のある存在へと進化してきましたが、地球上で彼に第五の要素、靈我が現れます。人間が単に4にとどまっていたとしたら、彼はいつも上から、神々によって善へと統制されていたことでしょう。すなわち、決して独立した存在へと進化することはなかったでしょう。人間は地球上で第五の要素、靈我への萌芽を手に入れたことにより自由になったのです。これによって人間は悪をなす可能性を得ましたが、

しかしこれによって独立性も手に入れたのです。5において現れない存在は、いかなるものも悪をなすことはできません。そして、私たちが悪と出会う所ではいたるところで - - そして実際それはそれ自身から有害な作用を及ぼすのですが - -、五元性が関わり合っています。これは至る所、外の世界でもそのようなのです。人間はただそれを見ないだけなのです。しかも、今日の唯物主義的世界観は、世界をこのように見ることができるということについて、まったく理解できません。ひとつの例で、5と出会うところでも、何らかの意味で阿育について語る正当性が出てくるということがわかります。医師がちょっとこのことを採用して、病気の経過をこれに従って研究してみれば、たいへん実り多い結果が得られるでしょう。つまり、病気がその発病から第五日までどのように進展するか、一日の中であれば真夜中から五時間めに、さらには第五週めにどうであるか調べるのです。というのも医師が最も効果的に介入できる時は、いつも5という数字が支配しているからです。それ以前は自然の経過にまかせる以外はあまり多くのことはできません。しかし、5という数の法則に気づくなら、助ける処置ができるのです。5という数の原理は事実の世界に流入しているからです。この原理が善を与える、悪の原理と呼ばれるのもっともなことです。このように多くの領域で5という数が外的な出来事にとって大きな意味を持つことを示すことができます。

人間の生には七つの時期があります。第一の時期は生まれる前の時期、第二の時期は歯の生え替わる頃まで、第三は性的成熟まで、第四はおよそその7～8年後まで、第五はおよそ30歳頃と続いていきます。人々が、これらの時期に何が問題となるの、ちょうど第五の時期に人間に何を近づけ、何を遠ざけるのか、知るようになれば、いかによい年齢を準備することができるようになるかについても、いろいろとわかってくるでしょう。その時、残りの人生全体に対して善いことあるいは悪いことの作用が及ぶでしょう。初めのいくらかの時期の場合、これらの法則に従って、教育を通して多くのことを行うことができます。けれどもそれから、人生の第五期に、後の人生全体にとって決定的な転換点がやってきます。この人生の第五の転換点は、少なくとも人間がいわば完全に確信をもって人生へと送り出される前に超えられねばなりません。今日主流をなしている、人間をあまりに早く人生に送り出してしまう原則は、たいへん害のあるものです。このような古い神秘学的原則に注意を向けることには、大きな意味があります。ですから、以前は、そのことについて知っていた人々の命により、人は親方と認められる前に、いわゆる修業時代と遍歴時代を卒業しなければならなかったのです。

七は完全性の数です。このことをまた人間自身を手がかりに明らかにすることができるでしょう。人間は被造物として四の数の中にいます。そして、善か悪の存在でありうるという限りで、五の数の中にいるのです。人間が萌芽として自らのうちに有しているものをすべて造り上げてしまったら、色の世界、虹においても、音の世界、音階においても、七という数が支配しています。生のあらゆる領域のいたるところで皆さんは七という数を一種の完全性の数として示すことができます。七の背後には迷信もおまじないもありません。

さて、もう一度一元性に注目したいと思います。他の数も考察したことにより、一元性について語るべきことが正しい光の中に現れるでしょう。一元性の本質的なものは、不可分性です。実際のところ、むしろ、一であることをさらに、例えば1/3や1/2分というふうに、分けることはできません。けれども、皆さんが思考の中で承認することのできる非常に意味深い重要なものがあります。つまり、霊的世界においては、2/3を除くと、1/3はあくまで一に属するものとしてあり続けるということです。何かが神から開示として分割されても、残り全体はやはり神に属するものとしてあり続けるのです。ピュタゴラス的な意味で「一を分割せよ。ただし、ひとえにおまえの思いの底で、残りのものが一のためにあるように一を分割せよ。」

本来、一を分割するとはどういうことなのでしょう。例えば、金の小板を考えてください。皆さんがこれを通して見ると、世界は緑色に見えます。つまり、金は、その上に白い光が当たると黄色い光線を反射するという特性をもっているのです。それではまだ白の中に含まれていた他の色はどこに行くのでしょうか。それは、対象の中に入り込み、それを通過します。赤い対象は、赤い光を反射し、他のものを自らのうちに取り入れるから赤いのです。他のものを残しておくことなしに赤をしるから取り出すことはできません。こうして、私たちは大いなる世界の秘密の緑に触れるのです。皆さんはこのことをある特定のやり方で観ずることができます。例えば、光がテーブルにかけられたテーブルクロスに当たると、私たちは赤い色を感受します。太陽光線に含まれている他の色は「吸い込まれ」ます。例えば、緑色はテーブルクロスに吸収され反射されません。私たちが赤い色と緑色を同時に私たちの意識の中に受け入れようと努める

ならば、私たちは再び一を回復したわけです。私たちはピュタゴラス的な意味で一を分割したのです。そうすると、残りのものは、そのまま維持されます。分けられたものを常に再び一と結びつけるということを瞑想的に成就すると、それは、人を高みへと進化させる意味深い営みとなります。数学においてもこれを表す式があります。秘密（オカルト）の学院ではどこでも通用するものです。

$$1 = (2 + x) - (1 + x)$$

これは、1をどのように分割するか、分けられた部分が再び1となるようにどのように提示するかを表していると思われる秘密の公式なのです。神秘学者（オカルティスト）は、一の分割を、部分が常に再び一へと連結されるように考えねばなりません。

以上のように、今日は、数の象徴学と呼ばれるものを考察に委ね、世界を瞑想的に数の観点の下に動かすと世界の秘密の内奥に迫ることができるということを見てきました。

補足としてもう一度述べておきたいことは、第五週め、五日め、あるいは五時間目においては、何かをしくじったり良くしたりできるということに気づくことが大切であるということです。七週め、七日め、あるいは七時間めには - - あるいは相応する特定の数の関係、たとえばその中に7もあるので、3 1/2においては - - 常に何か、そのこと自体を通じて起こります。たとえば、熱はその病気の七日目に一定の性格を示すでしょう。あるいは14日めにも、世界の構造を示す数の関係が常に根底にあるのです。

ピュタゴラス的な意味で、「数を探求せよ」と言われることに、正しい仕方で沈潜する人は、この数の象徴学から生と世界を理解することを学びます。このことについて、今日はみなさんに概略的にご理解いただけるようお話した次第です。

第四講

シュトゥットガルト 1907年 9月16日

黙示録の封印。(1907年3月の)ミュンヘン会議の祝賀ホールにおける封印の説明。人類進化の像としての黙示録の七つの封印。薔薇十字のシンボル。封印が人間に及ぼすことのできる生気を与え啓発する影響について。さらに、霊的なものが世俗化されるとき破壊的な作用について。

象徴や形象のうち、そもそも私たちが所有していて古今の神秘学者たちからも認められている最も意味深長なものは、人間自体です。人間は、今も昔も、常にミクロコスモス、小宇宙と呼ばれてきました。これは、まったく正しい言い方です。というのも、人間を詳細に綿密に知るようになる人には、ますます人間のうちに人間の外部の自然の中に広がっているあらゆるものが含まれていることが明らかになってくるからです。このことを理解するのは、はじめは困難かもしれませんが、けれども、これについて思索を深めれば、人間のうちには全自然からとった一種のエキス、精髓、あらゆる実質と力が見いだせるということの意味を理解できるでしょう。皆さんが何らかの植物をその本質という点に関して研究し、充分深く探求することさえできれば、人間の有機体組織の中に、より食傷された形ではあっても、同じ本質が含まれていることがわかりになることと思います。さらに、外にいる動物を考えてみてください。皆さんは常に、人間の有機体組織の中に、その本質に従って、あるやり方でその組織中に取り込まれているように見える何かを指摘することができるでしょう。

このことを正しく理解するためには、もちろん宇宙の進化を神秘学(オカルト)的観点から考察することが必要です。それで、たとえば神秘学者(オカルティスト)は、もし外部の自然の中にライオンが存在しないなら、人間は決して今日のような性質の心臓を持つことはないということを知っています。まだライオンというものが存在しなかった時代へと遡ってみましょう。人間は最も古い存在ですので、その当時に人間はいました。けれども、その時の人間はまったく別様に形成された心臓を持っていたのです。自然の中には、至る所に、もちろん必ずいつも明白ではないにしても関連があります。かつて人間がはるか太古の時代に自らの心臓を今日の形態へと発達させた時、その時にライオンが生まれました。両者は同じ力を形成したのです。それは、あたかも皆さんがライオンの本質を抽出し、神の如き巧みな技により、それから人間の心臓を形成したかのようです。皆さんは人間の心臓には何らライオンのようなものはないとお考えになるかもしれませんが、神秘学者(オカルティスト)にとってはこれは本当なのです。あるものがひとつの関連、ひとつの有機体組織の中に置かれる時、それが独立状態にある時とはまったく別の作用をすることを忘れてはいけません。逆のこういうふうにも言うこともできます。皆さんが心臓のエッセンスを取り出すことができたとして、この心臓に相応した存在を作り出そうとするなら、そしてその存在が有機体組織の諸力に規定されないなら、それはライオンになるのです。勇敢さ、大胆さといった特性、あるいは神秘学者(オカルティスト)が言うような人間の「王者らしい」特性のすべてはライオンとの関係に由来します。そして、秘儀参加者であったプラトンは、王者のような魂を心臓の中に置いたのです。(注/プラトン「国家」では勇気(thymos)はホメロスに従って心臓に置かれる)

人間と自然のこのような関係に対して、パラケルススはたいへん見事な比喻を用いました。彼は、「それはあたかも自然の中でひとつひとつの存在が文字であるかのようだ。けれども人間はこれらの文字から組み立てられた言葉なのだ。」と言います。外には大いなる宇宙 - マクロコスモス、私たちのうちには小なる宇宙 - ミクロコスモス。外ではいかなるものもそれ自体として存在し、人間にあっては他の器官も共に織り込まれているハーモニーによってすべてが規定されているのです。そして、だからこそ私たちは人間の中に全宇宙の進化、私たちの一部をなす全宇宙の進化を観照することができるのです。

皆さんは、私たちの一部をなしているこの宇宙との関連における人間進化の像(すがた)を、ミュンヘンでの会議期間中、祝賀ホールに掲げられていた封印の中に見ることができます。何が示されているか見てみましょう!

最初のものは、白い衣をまとった人物を示しています。その両足は金属、青銅のようです。口からは炎の剣が突き出しています。彼の右側は諸惑星 - 土星、太陽、月、火星、水星、木星、金星の記号で取り

巻かれています。ヨハネ黙示録をご存知の方は、黙示録の中に、この像とかなり一致する記述が見られることを思い出すことでしょう。ヨハネは秘儀参入者であったからです。この封印は、つまり、言うならば、人類全体の理念を提示しているのです。ここにおられる古参の方々にはすでにおなじみの表象をいくらか思い出していただくと、このことを理解できると思います。

人間の進化をさかのぼっていくと、人間がまだ不完全な段階にある時代に到達します。例えば、人間は皆さんが今日両肩の上にのせているもの、つまり頭部をまだもっていませんでした。当時の人間を描写すると本当にグロテスクに聞こえるでしょう。つまり、頭部はだんだんと発達してきたのであり、さらにこれからも進化していきます。人間においては今日、いわば終結に達した器官があります。自らを作り変えていく別の器官もあります。そう、喉頭は力強い未来を有しているのです。むろん、心臓とも関連しています。今日、人間の喉頭はようやくその進化の始まりにあって、将来、霊的なものに作り変えられた生殖器官となっていくのです。今日の人間が喉頭を使って行っていることを明らかにすれば、この神秘についての表象を得ることができるでしょう。ここで私が話しますと、皆さんに私の言葉が聞こえます。このホールが空気に満たされていて、この空気中に一種の振動が引き起こされることにより、私の言葉が皆さんの耳に伝達されるのです。私がひとつの単語、例えば「宇宙（ヴェルト）」という語を発音すると、空気の波が振動します。 - - これは私の言葉の受肉（物質化）です。今日、人間がこのように作り出すものは、鉱物界における創造と呼ばれています。空気の運動は、鉱物的な運動です。喉頭を通じて、人間は環境に鉱物的に働きかけているのです。けれども、人間は、自らを高め、いつか植物的にも働きかけるようになるでしょう。単に鉱物的な振動だけではなく、植物的な振動をも引き起こすようになるでしょう。人間は、植物を出現させるでしょう。その次の段階は、感受する存在を肩って出現させるでしょう。そして、進化の最高の段階では、人間は自らの喉頭によって自分に似たものを生み出すでしょう。今日、人間は魂の内容のみを言葉によって語ることはできますが、その時には自分自身をそのまま言い表すようになるのです。そして、人間が未来において存在を方って出現させるように、人類の先駆者である神々は、今日存在するすべてのものを語って作り出した器官を備えていたのです。神々はすべての人間、すべての動物、そしてその他すべてを語って生み出しました。これらはすべて字義どおりの意味において発せられた神々の言葉なのです。

「初めに言葉があった。言葉は神のもとにあった。言葉は神であった。」これは、思弁的な意味での哲学的な言葉ではありません。まったく字義通りにおこなわれた太古の事実をヨハネは提示したのです。

そして、終わりにも言葉が言葉があるでしょう。言葉の具現が創造であり、人間が未来に置いて生み出すものは、現在言葉であるものが具現化したものなのです。けれども、その時には、もはや人間は今日のような物質的形態はとらないでしょう。人間は土星上でとっていたような形態、火の実質にまで進歩しているでしょう。このように宇宙進化の始まりにおける創造的な力は宇宙進化の終わりにおける私たち自身の創造する力と結びついているのです。

今日あるすべてのものを宇宙の中に言葉で出現させた存在は、人間の偉大な模範です。この存在は、宇宙に土星、太陽、月、地球 - - 地球は半分ずつで火星 - 水星 - -、木星、金星を出現させました。この七つの星が暗示しているのは、これらは人間がどの程度まで進化できるかを表す記号であるということです。火の実質の中に、この惑星は最後に再び現れ、人間はこの火の実質の中で創造的に語ることはできるでしょう。これが口から突き出ている火の剣なのです。すべては火のようになります。従って、両足も溶けた青銅なのです。見事に印象深く、進化の意味がこの記号（しるし）に表されています。

今日の人間を動物と比較してみますと、その違いは「人間は個々人として、個々の動物が自らのうちに有していないものを、自らのうちに有している」と言わなければならないということに表されています。人間は個人の魂を持ち、動物は集合魂を持つのです。人間のひとりひとりがひとつの動物の属全体にあたります。例えば、すべてのライオンは共通でひとつの集合魂を持つのみです。この集合・自我は、人間・自我とまったく同じですが、ただ集合・自我は物質界にまでは下降しません。アストラル界でのみ見いだされるのです。この地上では、各々が自我を担っている物質的人間が見いだされます。アストラル界では、皆さんはアストラル実質の中で、皆さん自身と同じような存在と出会います。ただ、物質ではなくアストラル的な覆いの中で出会うのです。皆さんは、皆さんのような人と話すように、彼らと話すことができます - - これが動物の集合魂です。

人間も以前の時代には集合魂を持っていたのですが、次第次第に今日の独立した存在へと進化してきた

のです。これらの集合魂はもともとアストラル界にあり、それから肉の中に宿るために下降してきました。今、アストラル界の中に人間の原初の集合魂を探してみますと、人間の由来である四つの種類が見いだせます。この四種を、今日の動物の属をなしている集合魂と比較しようとする、次のように言わねばならないでしょう。四種類のうちのひとつはライオン（獅子）と比較される。もうひとつは鷲と比較される、三つめは牛と、四つめはその自我が下降してくる前の太古の人間と比較できる、と。けれども、さらに人間のより高次の顕現のための集合魂、つまり子羊、救い主の徴（しるし）である神秘の子羊により示される集合魂も存在しますし、地球が存在する限り、これからも存在するでしょう。これら五つの集合魂の分類 - - すべての人に共通する偉大な集合魂を取り巻く人間の四つの集合魂 - - これを第二の図像は描き出しています。

私たちが人間の進化をはるか彼方までさかのぼっていくと、何百万年も助けを求めなければなりません、また別のものが現れてきます。現在、人間は物質的に地球上にいます。しかしながら、この地球上を動き回っていたものが、まだ人間の魂を受け取ることができなかった時代もあったのです。その時、この魂はアストラル界にありました。そして、さらにさかのぼると、この魂が霊界、すなわちデヴァチャンにあった時代に至ります。魂は、地球上で自らを浄化したあかつきには、未来において再び、この高次の段階に上昇するでしょう。霊からアストラル的なものを経て物質的なものへ、そして再び霊へ...これが人間の長い進化の道のりなのです。けれども、これを人間が土星及び他の惑星状態で経てきた進化の時間と比べると、短期間のように思われます。人間は単に物質的な変化のみではなく、霊的、アストラル的、物質的变化を遂げてきたのです。こうした変化を追求していくと、霊的世界にまで上昇しなくてはなりません。そこでは、天球の音楽、この霊的世界で空間にみなぎりあふれている音が知覚されます。そして、再び人間がこの霊的世界に慣れていくと、この天球のハーモニーが彼に向かって響きわたるでしょう。これがオカルトでは天使のラッパの響きと呼ばれるのです。従って、第三の図像はラッパです。霊的世界から啓示がやってきますが、それは人間がなおいっそう進歩を遂げたときはじめて、姿を現すのです。それから、人間に七つの封印を施された書物が開示されるでしょう。この封印はまさに私たちがここで考察しているものです。これらの謎が解かれるでしょう。ですから、中央には書物、下部には人類が置かれます。というも四頭の馬は、時代を経てきた人類進化の諸段階に他ならないからです。

けれども、もっと高次の進化があります。人間は、もっと高次の世界に起源を持ち、そして再びこの高次の世界に上昇していくでしょう。その時、人間が今日とっているような形態は世界の中へ消えていくでしょう。今日、外の世界にあるもの - - 人間を構成している個々の文字 - - を人間はその時、再びすべて受け取っているでしょう。人間の形態は世界の形態と一致していることでしょう。神智学のある種の通俗的な記述において、自分自身の内に神を探し求めると教えたり語ったりされています。けれども、神を見出そうとする者は、万有のうちに広がっている神の作品のうちに神を探し求めねばなりません。宇宙の中の何もかも単なる物質 - - それは単に見かけ上そうであるにすぎません - - ではありません。実際はすべて物質は霊的なものの現れ、神の活動の知らせなのです。そして、人間は来るべき時代の経過において、自分の本性をいわば拡大していくでしょう。ますますいっそう人間は世界と一体化し、人間の形態の代わりに宇宙（コスモス）の形態を置くことで、自らを提示することができるのです。このことは、岩、海、円柱を備えた第四の封印に見いだせます。今日、雲として世界を通り過ぎてゆくものが、人間の肉体を形づくるための素材を提供するでしょう。今日、太陽の霊のもとにある諸力が、さらに限りなく高められたやり方で、霊的な諸力を作り出すことになるものを、未来において人間にもたらすでしょう。この太陽の力こそ、人間が手に入れようと求めるものなのです。自分の頭部、つまり根を地球の中心に向けて沈めている植物とは反対に、人間は頭を太陽に向けています。そして、人間は頭を太陽と合体させ、より高次の力を受け入れるでしょう。このことは、岩と円柱の上の雲の体にある太陽の顔の中に見てとれるでしょう。その時、人間は自らを創造するものとなっているでしょう。そして、完全な創造の象徴として、多彩な虹が人間を取り巻いています。ヨハネ黙示録の中にも、皆さんはよく似た封印を見いだせるでしょう。雲の中に書物があります。黙示録では、秘儀参加者がこの書物を飲み下さねばならないと語られています。これによって、人間が単に外的に叡智を受けられるだけでなく、今日食物で自らを満たすように、叡智で自らを満たし、自身が叡智を体現するようになる時が告げられているのです。

それから、宇宙における大いなる変化が目あたりに怒る時に近づきます。人間が太陽の力を引き寄せてしまうと、太陽が再び地球と一体化するというあの進化段階がはじまります。人間は、太陽の力により

太陽を生み出すでしょう。ですから [第五の封印では] 太陽を生む女なのです。その時、人類は非常に道徳的、倫理的になっているので、低次の人間本性の中にある有害な力はすべて克服されているでしょう。これは、七つの頭と十本の角を持つ動物によって描かれています。太陽の女の足下に、地球が用いることができず押し出していなかったあらゆる有害な実質を含む月があります。今日、月が魔術的な力で地球上でなしていることはすべて、その時に克服されるでしょう。人間が太陽と一体になるとき、人間は月を克服したのです。

続いて [第六の封印で] このように高次の霊化にのぼりつめた人間がいかにミカエルの形姿に似ているかが表されています。ミカエルは、この世の悪いものを龍の象徴 (シンボル) の中につなぎとめているのです。

私たちはあるやり方で人類進化の初めと終わりが同じ変化の状態であることを見てきました。この同じ状態が、流動する火の足を持ち口から剣を突き出した男の中に描かれていることがわかりました。意味深い象徴学においては、私たちに宇宙の全存在が聖杯の象徴において明かされます。皆さんにこの第七の封印について二、三概略的に話しておきたいと思えます。

神秘学者 (オカルティスト) としてこの世界を知るところを学ぶ者は、空間というものが物質的世界にとって、単なる空虚なものとはまったく別の何かであるということを知っています。空間は、すべての存在をいわば物質的に結晶化させて出現させてきた源泉なのです。水で満たされた完全に透明なガラス製の立方体の器を考えてください。さて、それからある冷却する流れがこの水を貫いて導かれ、さまざまなやり方で氷が形成されるのを思い浮かべてください。こういうふうにして、世界創造のひとつの表象、つまり空間を得ることができます。この空間の内部へと神的な創造の言葉が発せられ、ありとあらゆる事物が結晶化し生み出されたのです。

神的な創造の言葉が内部に発せられたこの空間を、神秘学者 (オカルティスト) は水のように透明な立方体によって表します。この空間の内部でさまざまな存在が発達していきます。私たちの最も近くにある存在を、立方体は三つの垂直方向、つまり三本の軸、長さ、高さ、幅を持ち、これが立方体の三つの次元を示しているということで、最もよく特徴づけることができます。さて、これらの、外の自然界にある三つの次元に反対の次元を加えると考えてみてください。皆さんはおよそ次のように想像することができます。ひとりの人物がある方向に進み、もうひとりが彼に向かってやってきて両者がぶつかる、というふう。同様に、各空間次元にも、それぞれ反 - 次元が存在するのです。従って、私たちは全部で六本の線を持つこととなります。これらの反対線は同時に人間存在の最高の構成要素の原初的萌芽を表しています。空間から結晶化された物質体は、最も低次のものです。霊的なもの、最高のものはその反対物で、反 - 次元によって示されます。ここで、進化において、まず最初に、激情、欲望、本能の世界に合流させることで、最もよく描かれ得る存在、こういう存在の反 - 次元が形成されるのです。最初、これはそういう存在です。それから、のちに何か別のものになります。ますますいっそう、この存在は自らを浄化していきます - - どれほど浄化されるか、私たちは見てきましたが - - が、もとは蛇によって象徴される低次の衝動から出発してきたのです。この経過が互いに向き合った二匹の蛇の中での反次元の融合によって象徴されているのです。

人類は自らを浄化することで『宇宙の螺旋』と呼ばれるものへと上昇します。浄化された蛇の体、この宇宙の螺旋は、深い意味をもっています。皆さんは、これについて次のような例でひとつの概念を得ることができます。現代の天文学はコペルニクスの二つの法則に基づいていて、第三の法則は顧みられず放置されています、第三法則は、太陽もまた動いているというものでした。太陽は、前方へねじれながら進んでいて、その結果、地球は太陽とともに複雑なカーブを描いて運動しているのです。同じ事が、地球の回りを運動している月にもあてはまります。これらの運動は、初歩の天文学で受け入れられているよりもはるかに複雑なのです。螺旋が天体のなかでどのような意味をもっているのか、ここでわかりましょう。この天体は、将来、人間と一致するような形態を表しているのです。その時には、人間の生み出す力は浄化され、純化されているでしょう。人間が浄化された蛇の体として進化させていったものは、その時、もはや下から上へではなく、上から下へと作用することでしょう。私たちの中で変化した喉頭は、聖杯 (グラール) と呼ばれる杯になるのです。そして、この生み出す器官と結びついているもうひとつの器官も同様に浄化されているでしょう。この器官は、宇宙の力の精髓 (エキス) 大いなる宇宙の精髓となるでしょう。精髓の中のこの宇宙霊は、聖杯にむきあう鳩の図像で描かれています。ここで、鳩は、人間がいつか

宇宙（コスモス）と一体化する時に、宇宙から働きかける霊化された授精作用の象徴なのです。この出来事の想像力全体が、虹によって示されています。これはすべてを包括する聖杯の封印なのです。

これ全体が、宇宙と人間の関係についての意味を、驚くべきやり方で他の封印の意味もまとめるようにして伝えてくれます。従ってここにも封印の周囲の縁に書かれた文字として、宇宙の秘密が現れています。この宇宙の秘密は、人間が原初に根源の力から生まれてきたことを示しています。どんな人間も、振り返ってみれば、意識の力から新しく生まれたなら、今日霊的に成し遂げている過程を、原初の時代に経てきたのです。薔薇十字会ではこのことを（頭文字で）E・D・N = [ex deo nascimur]（神から生まれた）と表します。

開示の内部では、第二のものが加わることを見てきました。すなわち、生のための死です。人間は、この死の中で再び死を見出すために生きとし生けるものすべての源泉の中で、この感覚の死を克服せねばなりません。この源泉は、すべての宇宙進化の中心点なのです。というのも、私たちは、意識を獲得するためには死を見出さねばならないからです。しかし、私たちはこの死の意味を救い主の秘密の中に見出すとき、死を克服するでしょう。神から生まれたのと同様、私たちは秘教的な叡智の意味で、キリストにおいて死ぬのです。I・C・M [in Christo morimur]（キリストにおいて死ぬ）

そして、何かが開示される所ではどこでも、第三のものに統一されるべき二元性が示されるので、人間は死を克服したとき、自らが、宇宙を貫く霊（鳩）と一体化することでしょう。人間は復活し、再び霊のうちに生きるのです。P・S・S・R = [per spiritum sanctum reviviscimus]（聖霊により復活する）

これが、神智学的薔薇十字です。これは、宗教と科学が宥和する時代を照らすのです。

さて、以上のとおり、このような封印には、宇宙全体が描かれており、しかも宇宙は魔術師や秘儀参入者によって、この中にくみ入れられたため、封印には強い力が内在しています。皆さんは、いつも新たにこれらの封印にもどってこることができます。封印は、瞑想を通して無限の叡智を開くことができるということを、皆さんは改めて見出すことでしょう。封印は、宇宙の秘密から創られていますので、人間の魂に強力な影響を及ぼします。今日ここでお話しているような、宇宙の聖なる神秘へと高めてくれるような、そうした事柄が語られている部屋に、こうした封印を掲げるなら、それらは、人にそれと気づかれなくても、最高度に生き生きと啓発する作用を及ぼします。けれども、同時に、こういう意味をもっているからこそ、世俗化されることを嫌います。奇妙に聞こえるかもしれませんが、霊的なことは何ら語られず、俗っぽい言葉が語られている部屋にこういう封印がぐるりと掛けてあると、やはり作用は及ぼすものの、この場合、肉体組織を病気にするような作用をします。通俗的な言い方もかもしれませんが、封印は消化を損なうのです。霊的なものから生まれたものは、霊的なものにふさわしく、世俗化されてはなりません。このことをそれ自身がその作用によって示しているのです。霊的な事柄の記号は、霊的な事柄が起こり、作用を得る所にふさわしいのです。

第五講

ケルン 1907年 12月26日

人間の環境への態度。事物の背後にある魂的・靈的なものの開示としての世界。動物、植物、鉱物の魂的・靈的なもの。アストラル界にある動物の集合自我、その基本要素は叡智。人間・自我の根本要素としての愛の養成。植物界、鉱物界の苦痛と喜びの感情。秘学の修練においては単に形象を觀照するだけでなく、内的に体験せねばならない。卍と五芒星の隠された意味。

今回の連続講義では、いくつかの秘学（オカルト）的記号や形象についてお話するつもりですが、その際、これらの象徴や記号の意味、意義が単に知性だけではなく、感情や心情と親密になるようにしていこうと思います。

皆さん全員がご存知のように、神秘学（オカルティズム）や神智学（テオゾフィー）においては、さまざまな形象や記号が使用されています。そして、このような記号や形象を解釈するのに、しばしば多大な機知と思弁が費やされていることも周知の事実です。さて、今回の連続講義は、こうした機知や思弁の多くが不適切であり、そもそも思弁や機知というものは、秘学的記号や象徴の本当の意味に近づく力を有していないということを示してくれるでしょう。神秘学者（オカルティスト）にとって、決して単に一般的な手引き書や著作で言及されているようなものが記号や象徴であるのではなく、通常はほとんど予測もしないようなところに、非常にしばしば秘学的記号や象徴が見いだせます。やはり、民族に根ざす神話や物語の中に深い秘密の（オカルト的）真理が隠されているのです。このような神話や伝説を解釈する際に通常犯されている過ちは、端的に言って、あまりに多大の機知、思弁が費やされていることです。あまりにも分別的、理性的に深い意味が追求され過ぎていると言っていいほどです。4回の連続講演では、このテーマを汲み尽くすことはできず、警句的に扱うことができるのみですが、それでも、ここで取り扱うことを、秘学的記号や象徴の高次の世界に対する関係、つまりアストラル界及びデヴァチャン界ないし靈的世界と呼ばれるものに対する関係について表象を形成することができるように描いてみたいと思います。

ご存知のように、日常の言語においても、何か高次のものを解釈しようとするとき、非常にしばしば特定の具象的な比喩が用いられます。例えば、認識や洞察に比喩を用いようとする時、「光」とか「認識の光」という言い方をします。私たちの言語のこういう単純な表現の背後に、時折、何か途方もなく深いものが潜んでいます。このような表現を用いるひとは、しばしばその起源をまったく意識しておらず、従って例えば光という比喩がどういうふうに認識や洞察と関係づけられているのか、全然考えてもいないのがほとんどです。彼らは、今日詩人が比喩を用いるように、それを比喩とみなしてるのです。もし神秘学（オカルティズム）においてこのような比喩的な意味のことだけを考えるとすれば、まったく道を誤ることになります。物事はもっとずっとずっと意味深いのです。今日の言語において、象徴的と言われているもの、比喩的と言われているもの、あるいはアレゴリーという表現で示されているもの。これらはたいてい間違った道に導くものです。ある記号は恣意的に何かあるもののために選ばれたのだと、安易に考えられています。神秘学において、記号は決して恣意的に選ばれることはありません。神秘学（オカルティズム）において、ある記号がひとつの事柄に用いられるときは、常に深い関連がそこにあるのです。

けれども、人間が神秘学の観点から見て、自らの環境に対してどのように位置づけられているかについて、少し立ち入ってみれば、神秘学の記号・形象と高次の世界とのこうした関連について真に明確にすることはできないでしょう。神秘学、あるいは今日神智学として知られている神秘学の基礎的な部分が、いつかより深い意味で、世にその使命を果たすときには - - これはまだやっとはじまったばかりなのですが - -、いつの日にか、私たちの生活と文化のあらゆる支脈が神秘学の真理と衝動に貫かれるようになった時には、人間の感情、感覚生活全体、過剰への位置づけ全体が本質的に変化してしまっていることでしょう。今日の人間が外界に対してどのように位置しているか示そうとすれば、次のように言わなければなりません。この数世紀以来、人間はますますいっそう外界に対して非常に抽象的、合理的、唯物的な関係をつくりあげてきた、と。今日野原に行く人は、春でも、夏でも、秋でも、たいてい眼前に現れるもの、感覚が受け取ることのできるもの、知性が感覚知覚から結合できるものを見えています。その人に美的な天分があれば、何か詩的な感受性があれば、彼はその知覚を感覚、感情で満たし、ある自然の出来事の場合

には悲しみや苦しみを、また別の場合には高揚、喜び、楽しみを感じるのです。

けれども、今日の人間の場合、無味乾燥な感覚的知覚が詩的、芸術的な感情に転ずるときでも、それは本来、神秘学によって今や理性や知性、頭脳ではなく、魂と心に与えられねばならないものの端緒にすぎません。神智学が単に物質界、アストラル界、デヴァチャン界のあらゆる出来事の思索的な要約を与えてくれるだけでなく、私たちの魂に深く親和的になり、魂が前とは違ったふうに受け入れ、感じ、学ぼうとするようになった時、はじめて神智学は人生における重要な要因となるのです。とりわけ私たちが明確にしておかなければならないのは、神智学と神秘学を通じてすでに昨日の記念講演で強調したことが現実にもますます起こってくるということです。つまり、人類は感覚に現れてくる外界において表現されているもののなかに、事物の背後に魂的、靈的なものとしてあるものが自らを開示する顔貌、身ぶり、表情を見てとるようになるのです。私たちは、地球の外部で起こっていること、つまり星々の運動の中にも、靈的、魂的なものの表現を見出すことを学んでいくでしょう。例えば、ある人の手の動きやまなざしの中に何か魂的なものが見出せるように。このようにして私たちは例えば晴れていく大気の中に、空気、水、土を真に浸透している靈的諸存在の内的な経過の外的な顕現を見ることを学んでいくのです。

さて、私たちの回りに生きている魂的、靈的なものに関して理解に達したなら、周囲の自然がどのように見えるか、ここでちょっと想像してみることにしましょう。まず、理想的にこれにとりかかるなら、次のように問わなければなりません。物質界で周囲に生きている被造物の魂、つまり動物、植物、鉱物の魂はいったいどういう状態なのか、物質的に感覚に現れているものの他にこの自然の三つの領域には何があるのか、と。動物の領域を観察しますと、これは靈的、魂的に、人間とはまったく根本的に区別されます。私たちが個々の人間の皮膚を境に閉じた内部に有しているもの、こういうものは個々の動物の中にはありません。個々の動物は私たちにとってむしろ人間の各部分に比較されます。同じ形態を持つ動物はすべて、つまりすべてのライオン、すべてのトラ、すべてのカストマス、すべてのハエ、その他動物界において同じ形姿を有するものはすべて、人間の一部分、例えば手の指に比較することができるのです。人間の十本の指を考えてみてください。十本の指の一本ずつにそれぞれひとつの自我を有した魂を与えられているとは思えないでしょう。十本の指は全部、一個の人間に属しているわけですから。人間ひとりひとりに自我 - 魂が与えられています。人間ひとりひとりに自我 - 魂が与えられているように、これを集合魂と呼ぶか群魂と呼ぶかは問題ではありません。問題なのは、物事をぼやけさせ、流動的に考えることです。このように、同じ形姿を持った動物のグループの場合、個々の人間のそれと同じ自我 - 魂が基礎になっていると認めなければなりません。けれども、この動物グループの魂は、人間の自我 - 魂が探索される場所を探しても見つかりません。人間のこの自我 - 魂が誕生と死の間に存する場所は、物質界です。これをもって、この自我 - 魂がその性質と本質により物質界のみに属するということが言われているわけではありませんが、人間の自我 - 魂は物質界で生きています。動物の集合 - 自我の場合はそうではないのです。同じ形姿を有する個々の動物の集合自我の場合、個々の動物がいる場所は問題になりません。ライオンがアフリカにしようところの動物園にしよう、まったく同じなのです。個々の動物は同じ集合自我に属し、この集合自我はアストラル界にあります。ですから、同じ形姿を持つ動物のグループから自我を見出そうとすると、靈視的にアストラル界にまで赴かなくてはなりません。アストラル界では、当の動物の集合 - 自我はこの物質界での人間の独立した個性です。もし人間が十本の指を伸ばした時、ここに仕切り壁を立て、壁の十個の穴から十本の指を突き出すと、壁の外側にいる人には十本の指しか見えません。十本の指の自我を探そうとすれば、壁の後ろ側に行かねばなりません。このように、個々のライオンには、すべてのライオンの集合自我の一部を見なければならぬと考えねばなりません。アストラル界へ行くと、すべてのライオン属の個性あるいは個体を見出すことができます。ちょうど壁の後ろ側に人間の十本の指が属する個体が見出せるように。同じ事が、同じ形姿を持つ他の動物の種類にも当てはまります。もし皆さんがアストラル界を「散歩する」なら、アストラル界にはこれらの動物の集合自我が居住しているのがおわかりになるでしょう。そこでは、この物質界でひとりひとりの人間に出会うように、この動物の集合自我と出会うのです。ただこれらの集合自我は、ちょうど十本の指を一本ずつ壁から突き出しているように、物質界へ、それぞれ分化した動物個体を差し伸ばしているのです。

しかしながら、動物の集合 - 自我の本性、内的な特性と個々の人間の特性であるものとの間には、著しい相違があります。この違いは、皆さんには非常に逆説的に思われるでしょうが、現に存在しています。つまり、ひとつの特異な事実があるのです。アストラル界での動物の集合自我の知力と叡智を、ここ物質

界での人間の知力、叡智と比較してみるなら、動物の集合自我の方が、根本的に賢いということがわかります。動物の集合自我がなすべきことは、最高度の自明性をもって行われます。人間は、進化を遂げていく中でようやく、その自我を動物の集合自我がアストラル界ですでに有している叡智にまで至らせなくてはなりません。むしろ、この動物の集合自我には、人間がこの物質界で地球進化全体を通して養成してきたものが欠けています。この特殊な要素は、動物の集合自我にはまったく見出せないものです。これは、愛という要素、愛であるもののすべて - - 血縁関係にある人間の血族的な愛という最も単純な形から、普遍的な人類愛の最高の理想の愛まで - - です。この要素は、他ならぬ地球進化の内にある人類によって養成されてきたものです。感情、感覚、意志衝動は、動物の集合魂も有しています。愛を発展させること。これがまさしくこの地球上での人間の使命なのです。これが動物には欠けています。動物の集合自我の基本要素は叡智であり、人間自我の基本要素は愛なのです。

私たちを取り巻いている自然そのものの内部で、この動物の集合自我の顕現をどのように感じとるべきか深く知ろうとするなら、ここで私たちを取り巻いているものすべてが、霊的な秘密と霊的な諸存在の顕現なのだとすることを思い起こさなければなりません。霊視的能力を備えていない人は、もちろんあのアストラル界での「散歩」をすることはできません。アストラル界では、この地球上で物質的な人間 - 自我に出会うように、そこに住んでいる動物の集合自我と出会います。けれども、霊視をしない人でも、この集合自我がなしている行為、作用をこの物質界で知覚することができるのです。毎年、秋が近づくと、鳥たちが北東から南西の暖かい地方へ向かって飛翔し、夏が近づくと再びまったく決まった進路を通って帰ってくるのが認められます。各々の鳥の属に対してその進路のひとつひとつを高度と方角に従って比較してみると、これらすべての中に、叡智が、深い叡智が存在することをひとは予感し始めます。この全体を導いているのは誰なのでしょう？それを導いているのは動物の集合自我です。さまざまな動物の属がこの地球上で成し遂げていることはすべて、動物の集合自我の行為であり、作用なのです。動物の集合自我のこれらの行為を追求すると、本質的に、これらの動物の集合自我は地球の周囲に広がっていて、地球の周囲で力となって展開しているということがわかります。地球は、多種多様な力、さまざまにうねり、直線や曲線、蛇行線をなして地球を取り巻いている力に囲まれているのです。これらの力をここではその作用、その顕現の中のみみることができます。人間がこれらの顕現を実感すると、霊視による場合に、動物の集合自我のところへ彼を導いていくものが何なのか予感することができます。このように、動物界で起こっている叡智に満ちた事に踏みいっていくすべてを学ぶことができます。動物の属や種がおこなっていることは、動物の集合自我の行為のいくばくかを垣間みせてくれるのです。

植物界では事情は異なっています。植物界でも神秘学の観察者に対して一連の自我が現れてきますが、この植物界に現れる自我は動物界のそれよりもずっと少数なのです。その数は限られているのです。植物のグループ全体がやはりひとつの共通の自我に属していて、それを探すとすれば、それらはもっと高次の世界に在ります。動物の集合自我がアストラル界にあって、この地球を取り巻いて流れるアストラル的なものの中で生きているのに対し、植物の集合自我はデヴァチャン界下部、私たち神智学に親しい者たちがデヴァチャン界のルーパ部分と呼びならわしている所に見出せます。そこでそれらは完結した個性として生きています。ちょうどこの物質界での人間のように、そこでは植物の集合 - 自我が逍遥しています。物質体というものをそもそも有していない他の存在たちと共に植物の集合 - 自我は低位デヴァチャン界に住んでいます。

どのようにしてこの植物の集合自我を知覚するすべが得られるのでしょうか。知覚それ自体はつまるところ霊視能力の発達と結びついています。この発達は低い段階から次第の高次のものへと進んでいきます。そもそもこれらの能力を得るために最初に発達させねばならないのは、物事に対する感情と感受性です。実際の、真に霊視的な能力は常にまず第一に感情と感受性の養成に基づいています。ただし、浅薄な利己的な感情ではなく、深く敬虔な感情です。これはまったく違うものです。

皆さんが植物を観照する時、何よりもとりわけ植物がその根を地中に発達させ、茎を上方へ伸ばし、葉を上へ向けて広げ、それが次第に萼葉、花冠へと形を変え、その内部で実を結ぶという経過に注意を向けるに違いありません。人間と次のような比較はできないということが重要です。つまり、人間の頭部、頭を植物の花冠と、人間の足を植物の根と比較してはならないということです。この比較はまったく間違っているのです。神秘学の学院では、常に以下のように指示され、語られてきました。お前たちは植物と人間を比較しなければならない。けれども、人間の頭を植物の根になぞらえるような仕方で比較しなければ

ならない、と。植物が根を地球の中心に向けているように、人間は頭を宇宙の方へ向けています。そして、植物がその花と結実器官を控えめに太陽に向けているように、人間はその生殖器官を恥じらいつつ、植物が根を向けている方向、つまり下部へと向けているのです。従って、神秘学では、「人間は逆立ちした植物である」と言われます。植物は、逆立ちした人間のように見えます。動物は両者の中間にいます。

通常植物と呼ばれているものの中には、単に植物の物質体とエーテル体があるのみです。けれども、植物もアストラル体と自我を有しています。それでは植物のアストラル体はどこにあるのでしょうか？私たちはその場所を問うことができます。というのも、植物の集合 - 自我は低位デヴァチャン界にあると言うのは、単にものごとの一般的な定義に過ぎないからです。植物のアストラル体と自我がどこにあるのかをまったく精確に示すことができます。植物のアストラル体、しかもこの地球上にあるすべての植物のアストラル体は、地球のアストラル体と同じものなのです。従って、植物は地球のアストラル体の中に浸されているのです。その場所によると、植物の自我は地球の中心にあります。私たちは、神秘的な観点から、地球をひとつの大なる有機体として、アストラル体を有する生きた存在としてとらえることができます。そして、この地球上にある個々の植物はその一部です。植物は個々に独立したものとしては物質体とエーテル体のみを養成しました。個々の植物、つまりユリやチューリップ、その他の一本一本は意識を有しません。地球が植物の意識、アストラル体、自我を担っているのです。けれども、そこには植物の自我だけが存在するわけではありません。まだその他に別の霊的存在がいるのです。けれども、その存在たちみんなに場所があるのかという問いを発してはなりません。それらは混じり合い、そこで非常に仲良く暮らしていくことができるのです。このように個々の植物を観察すると、それらに物質体としての特性は認められるかもしれませんが、個々の存在としての意識が植物にあるとはいえないのです。けれども、植物は意識を持っています。その意識は地球の意識と結びついていて、地球の意識の一部なのです。私たち人間が喜びと悲しみを張りめぐらし、これを互いに浸透させあう意識をもっているように、植物の個々のアストラル体が地球のアストラル体に浸透し、植物の自我は地球の中心点を貫いているのです。生きている植物は、動物の有機体組織の中で牛乳が占めているのと同じ位置を、この地球の有機体組織の中で占めています。植物が地球から芽吹き、緑に萌え、花咲く時も、牝牛が乳を与える時も、同じ種類のアストラル的な力が基礎になっているのです。皆さんが植物の花を摘み取っても、それは地球にとって何ら不快な感情ではありません。地球はアストラル体を有し、そのアストラル体で感じとります。植物を摘み取ると、植物は子牛が乳を吸う時に牝牛が感じるのと同じ感じを持ちます。つまり、一種の快さを感じるのです。地面から生えているものを引き離しても、地球 - - 個々の植物ではなく - - は快さを感じます。それに対し、植物の根を引き抜くと、それは地球にとってちょうど動物の肉をもぎとるのと同じようなもので、地球は一種の痛みを感じるのです。

単に集合自我についての抽象的な概念の中ではなく、空虚な抽象概念を感情と感受性へと変化させるように、この中に沈潜すると、私たちは自然の出来事とともに生きることを学びます。私たちの自然観察は生き生きとした感受なのです。秋に野を行き、鎌で穀物を収穫している人を見る時、私たちは鎌が茎を通り、茎を切り取るのにぴったり合わせて、畑の上に何か霊的な風のように快い感情が吹き渡っていくという予感を得ます。霊視者が地球のアストラル体の裡に見るものは、ここで描写されたことの霊的な根本原因なのです。このことを見抜いている人にとって、穀物の収穫はどうでもよい出来事などではありません。ちょうど人間の場合、何かある体験の際に、まったく決まった種類のアストラル的成形物が立ちのぼってくるのが感じられ、見えるのと同じように、秋には畑の上を地球の快い感情のこのようなアストラル的表現がかすめていくのが見られるのです。鍬が地面に畝を立て、植物の根に手を加える時には、事情は異なってきます。鍬での畝起こしは地球に苦痛を与えます。この時、苦痛の感情が立ちのぼってくるのが見えるのです。ここで言われたことに対しては、容易に反論できるでしょう。つまり、状況によっては、牧場へ行って役に立たないということからあらゆる花々を摘み取ってしまうよりは、植物を根ごと地面から引き抜き、移植する方が良いではないかと。このような非難は、道徳的な観点から考察すれば的を得たものであるかもしれませんが、ここではまったく異なった解釈が提示されているのです。たしかに、状況によっては、白髪になり始めた人にとって、これを美的な理由から正しいと見なすなら、最初の白髪を抜く方が良いと言えるかもしれません。それでもやはり引き抜くのはその人にとって痛いことなのです。花を摘むことは地球にとって心地よく、植物を根から掘り起こすと地球にとって苦痛であると言う時、これらはまったく別の観点なのです。[欠落] 生はそもそも苦痛を通して世に現れます。生まれてくる子供は、

出産する母親に苦痛を起こさせます。これは環境の中で単に認識するのみならず、自然の中に感情移入するすべをいかに学ばねばならないか、ということのひとつの例です。

鉱物界にもこのことはあてはまります。鉱物も自我を有しています。ただ、この鉱物の自我はさらに高次の所にあります。つまり、神智学文献が、アルーパ・デヴァチャンと呼びならわしている、デヴァチャン界の高位の部分にあるのです。この鉱物の集合自我は、物質界における人間の自我、低位デヴァチャン界における植物の集合自我、アストラル界における動物の集合自我と同様、それ自体部分として完結した存在です。物質界においては、単に鉱物の物質体のみが存在しますが、鉱物にはアストラル体もエーテル体もあるのです。霊視者は生きた連関を視ています。採石場に行って、鉱夫たちが石を切り出しているのを見ると、霊視者たちにはちょうど生体の肉に食い込む時のような感じがそこに生じているのがわかるのです。そして、鉱夫たちがそこで働いている間中、アストラル的な流れが岩石界を貫いています。アストラル体として鉱物が有しているものは、デヴァチャン界の低位部分に見出され、鉱物の自我はデヴァチャン界の高位部分に見出されます。岩石の自我は苦痛と喜びを感じます。岩石をたたき落とすと、鉱物の集合自我は喜び、満足を感じます。これは最初逆説的に聞こえますが、実際そうなのです。単に類推で考える人は、岩石を打ち砕くと、ちょうど生き物を傷つける時のように、岩石にとっては痛いことだろうと思うかもしれませんが、けれども、岩石を砕けば砕くほど、鉱物の自我は満足を覚えるのです。さて、「それではいったい鉱物の自我はいつ苦痛を感じないのか」と問うことができます。鉱物の自我にとっての苦痛を皆さんは次のような例で知覚することができます。食塩を溶かしたコップ一杯の水を想定してください。コップの中の水を冷やしていった塩が固い結晶となって分離されてくると、鉱物的な実質が再び固体化してきます。この個体の分離において苦痛が生じるのです。同様に、砕いた岩石を全部合わせてまた一つの岩石に戻すとしたら、やはり苦痛が生じます。鉱物の集合自我においては、鉱物が溶解する時はいつも喜びの感覚が生じ、固体化する時には苦痛の感覚が生じます。温めた水に塩を溶かすと満足感が生まれ、水を冷却して塩の結晶を析出させると、痛みの感覚が生まれるのです。

このことを、より大きな宇宙的な関連の中で表象してみるなら、私たちの地球の形成、鉱物の形成がどのようにこのような過程と関連しているかわかるでしょう。この地球の形成をずっと以前までたどっていくと、この地球の温度はますます上がり熱が高まっていきます。そしてレムリア時代において、岩石のひとつひとつが溶解している状態、現在は完全に固く結晶化してしまった鉱物が、ちょうど今日溶鉱炉の中で鉄が液体化されて流れ出しているように流れ出している状態に行き着きます。鉱物はみなこのような過程、つまり水を冷却するとコップの中に溶けていた塩が沈殿するというのなかにその小規模な形を見ることのできる過程を経てきたのです。このように、地球上ではすべてが固体化し、集結してきたのです。このような固体化は、液体状の地球の中への集結による固い結晶が次第に沈殿してくという形で進行しました。このような固体化によってのみ、地球は今日の肉体を持つ人類の住みかとなり得たのです。

この固体化はむろんある特定の時期に頂点に達したというようにとらえることができます。今日、ある意味でこの頂点の時期は過ぎています。今日すでに部分的には多かれ少なかれ溶解過程が記されなければならぬのです。地球がその目的に達した時には、そして人間がもはや地球から何も引き出すことができないほどに浄化され霊化された時には、地球自体もまた霊化されていることでしょう。その時には地球の鉱物的な含有物はすべて精妙にエーテル的になり、地球は物質化する前にもそうであったアストラルの状態に移行することができるのです。物理的な溶解過程はそれに到るための過渡的な状態なのです。

この地球が、私たちが今日の進化段階で順次進化していくための固い舞台基盤となるべく準備していた時期を考察してみると、私たちはそこに絶え間ない地球の受難の過程を記さなければなりません。固体化を進めることで、地球は苦しみ、「苦痛に呻吟する」のです。私たちの生存は、地球の苦痛を通して獲得されたのです。いわゆるアトランティス時代の初期まで、この苦痛が増していくのが認められます。人間が次第に自分で自らの浄化を行うようになった時から、地球も再び苦痛と受難から解放されるのです。この過程は、まだそれほど進んでいません。私たちの足下にある固い地盤の大部分は、今日なお苦しんでいます。霊視をそこへ向けてみるなら、私たちにとって固体は地球存在の呻吟であることがわかります。このような事実を神秘的な由来から探求し、偉大な宗教的文献の中にそれらを再び見出す人には、こうした文献が霊的世界のいかなる深みから書き上げられたかが開示されます。その時、これらの宗教的古文献を尊重する感情がなおいっそう高まってきます。経験を通じて、私たちは外的世界の事実を目を向けつつ、いかなる真実の基盤がパウロの言葉、つまり「すべての自然は苦痛に呻吟する養子を得ることを待ち焦が

れつつ」の根拠になっているか、経験的に認識することができるのです。このパウロの言葉をちょっと翻訳してみると、「地球生成のすべては、後に地球の存在たちにとって『養子を得る』つまり霊化が成し遂げられるための、苦痛のもとでの生成、苦痛のもとでの固体への凝集である」ということです。

真に秘密の修練と呼ばれるものにおいては、それらを見たとき、私たちの裡に感情を呼び起こすような、周囲の世界のイメージからとりかからなければなりません。まず始めに修練をやり遂げようとする弟子に、外部の自然で起こっていることを単に外的な出来事として観るのみならず、内的な体験として魂全体をもって、いかにこの地球の生成、固体化が苦痛を引き起こしているかを感じとることができるような表象、概念を伝えられます。この苦痛の心象は、実際の霊的な事実を提示しているのです。真の神秘学においては、像は何らあれこれ考えてつくり出されたものではなく、実際の霊的事実から読み取られたものなのです。いかなる哲学も、思弁も、最高度の明敏さも、このような像の謎を解くことはできません。高次の世界の実事を知ることによってのみ、理解に導かれるのです。神秘学においては、あらゆる像は霊的事実を表しているのです。

今日は、皆さんが基礎的な神智学において理念、概念、表象として修得しておられるものが、いかにして次第に体験へと導かれるかを暗示するだけにとどめておきたいと思います。何しろ神秘学におけるいかなる図像も体験からのみ取ってこられたのですから。例えば、有名な卍の図形を例にとってみますと、さまざまな文献に、この図形に関する極めて機知に富む解釈を見出すことができます。これはもともとはどのようにして神秘学に取り入れられたのでしょうか。この図形は、私たちがアストラル的な感覚器官と呼んでいるものの模像に他なりません。ある種の処置、修練によって、人間はアストラル的な感覚器官を養成することができます。この二本の線（図示）は、本来、霊視者の霊眼に、炎の車輪が花のように見えたアストラル体の中での動きなのです。これらは蓮華とも呼ばれます。この車輪ないし蓮華 - - それらのうち例えば、両眼のあたりには二弁のもの、喉頭のあたりには十六弁のものが位置しますが - -、アストラル界に発光現象として生じてくるこのようなアストラル的な感覚器官を表す記号、図形が卍なのです。あるいはまた別の記号、いわゆる五芒星（ペンタグラム）を考えてみましょう。思索しても哲学しても、五芒星の本来の意味を見出すことはできません。五芒星はひとつの現実なのです。これは、人間のエーテル体の中に見出せる流れ、力の流れの作用を描き出している図像なのです。人間の場合、ある種の力の流れが左足から頭部の一定の一まで上昇し、そこから右足へ、次いで左手へ、そこから身体を通り、心臓を通過して右手へ、そして右手から再び左足に戻ります。その結果、人間の中に、頭、腕、両手、両脚、両足を通る五芒星を描きこむことができます。これを単なる幾何学的な図形としてのみではなく、力の作用として表象せねばなりません。人間のエーテル体の中に、皆さんは五芒星を有しています。力の作用は、正確にこれらの五芒星の線をたどっています。各線はさまざまにねじ曲がることもありますが、常に五芒星の形を保って、人体に書き込まれています。五芒星はひとつのエーテル的な現実です。象徴ではなく、事実なのです。

このように、神秘学においては、どの象徴も霊的世界の実事像です。こうした事実が根ざしている世界を示唆することができてはじめて、その意味が認識されます。従って、最高度の明敏さといえども、神秘学の記号の解釈に至ることはできないのです。唯一 [霊的世界の] 体験から、神秘学の記号と象徴の意味を見出すことができ、この意味を認識することで、人間は「何かを始める」ことができるのです。ですから人間が、まず霊視的な能力によって見出されたことを伝達され、語られて、それから獲得することは、決して不必要なことではありません。そして、探求された事実から、再び人間はこれらの事実自体の原因へと回帰させられるのです。

記号や象徴と同様、古い伝説や神話においても事情は同じです。伝説や神話は民衆文学からつくり出されたものだとするのは、学識上の机上の空論です。民族は創作しません。すべての伝説や神話は、人間がまだある程度霊視能力を有していた時代の遺物なのです。ヨーロッパの伝説や神話において語られていることは、人間が以前に見た事実を保存しています。これらの伝説、メルヒェン、神話の中にあるすべては、本来霊視的に見られたもので、本来の霊視的経験を見たとおりに語っているのです。神話とはそもそも霊視的経験が見たとおりに語られたものなのです。

今日でもなお、神話において語られている出来事全体をアストラル界で追求することができます。ヴォータンあるいはオーディンによる行為は、実際に起きた事なのです。神秘学的な記号、象徴、封印の背後に、真実を探ることができるのです。しかも、思弁によってこれらの記号の解釈を企てることが少なけれ

ば少ないほど良いのです。

このように、この連続講演では、神秘学の実感へと入っていこうと思います。記号は考え出された作り事などではなく、霊的世界における実際の出来事の模倣ないし複製です。そして、神話において出会うすべての物語は、まだ人間の大部分が霊視力を有していた頃に見たことの再現なのです。

第六講

ケルン 1907年 12月27日

集合自我と個の自我。人間の本質的構成要素の完成度の違い。未来における生きた法則の支配のための必要条件：秘蹟主義（サクラメンタリズム）の秘密。物質体における本質的構成要素の表出（感覚器官、腺、神経、血液）とエーテル体における表出（人、獅子、牛、鷲）。人間の各種族におけるこれらのさまざまな表出。人間の集合魂（諸民族）。その存続と変容。不死鳥（フェニックス）。秘学（オカルティズム）における言葉の象徴学と靈的な修練にとっての意味。

昨日の前置きに続いて、今日はすぐいくつかの大変特徴のある記号や形象についてお話することにしたしましょう。

昨日強調されたのは、この物質界に生きている人間だけが個としての魂、つまり自我を有していて、私たちの周囲にいる動物たちは集合自我、集合魂を有していること、集合自我はアストラル界に生きていてそこでは完結した存在として見いだされるということでした。このように動物界と人間界は、靈的に観察してみると、集合魂ないし集合自我と個としての自我として互いに相対峙しているのです。ただし、これを宇宙においてあたかも個々の存在間にまったく移行状態が存在しないかのように思い描いてはいけません。自然は飛躍しないという格言は、神秘学者にはまったくあてはまらないとは言え、至る所に移行状態が見られるのは確かです。つまり、動物界の集合魂と人間の個別的魂との間にも、移行状態が見出せるのです。人間がこの地球紀に出現してすぐに完全な個別的魂を有していて、この魂がこの地球上で同じやり方で何度も何度も受肉してゆく、というふうに思い描くとしたら、それは正しくありません。むしろ、今日の人間は、太古の時代に有していた集合魂から、まだ自分のものになっていない完成された個別的魂へと徐々に移行している状態なのです。人間はまだその物質体に個別的自我を完全に組み込んでいく途上にあります。この地球紀が多かれ少なかれ完了するときになってはじめて、人間はこの完成された個別的魂を得るでしょう。大多数の人々にとって、今日自我は集合自我と個別的自我の中間物です。過去へとさかのぼればさかのぼるほど、人間の自我はいっそう集合自我の度合いを増します。地球紀の初め、魂が初めて神的な世界からこの物質界に降ってきたとき、人間の魂はまだ集合自我でした。複数の人間がいっしょにひとつの共通の魂、すなわち集合自我を有するグループに属していたのです。

このことをひとつの面として記憶にとどめておいてください。さて、もうひとつの面として、人間本性の構成要素そのものをもう少し詳しく見ていきましょう。これは、もう繰り返し言われてきたことなので、皆さんはもう十分ご承知のことと思いますが、人間はまずその本質として四つの構成要素、すなわち物質体、エーテル体あるいは生命体、アストラル体、自我を有しています。この自我は、もっと正確に観察すると、さらに三つの部分、つまり感受魂、悟性魂あるいは心情魂、意識魂という名で呼ばれている部分に分かれて現れます。

感受魂と悟性魂ないし心情魂においてようやく独立した自我がほのかに現れはじめ、意識魂に至ってようやく自己意識的な自我の最初の名乗りが得られます。さらに、人間の本質の第五の構成要素、つまり靈我ないしマナスと呼ばれるものも徐々に人間の中に入り込んできているように見えます。従って、今日の人間の場合、次のように構成されているのです。つまり、物質体、エーテル体ないし生命体、アストラル体、それからアストラル体と内的に結びつきアストラル体の中にはめこまれているようになっている感受魂、そして悟性魂と意識魂、さらに本来の自我 - 魂である意識魂の中に靈我ないしマナスが組み込まれています。これでおよそ今日の人間を想定することができるでしょう。

さて、これら人間の構成要素のうちどれが最も仕上がった、完成されたものなのか明確にしておかなければなりません。すでに私から説明を受けた方もいらっしゃると思いますが、今日の人間が進化したように、最も仕上がった、最も完全に発達した構成要素は物質体なのです。ただし、「最も仕上がって、最も完全に発達している」ということと、「高次の性質を持つ」ということを混同してはいけません。なるほど、エーテル体とアストラル体は、その程度において物質体よりも高次の性質を持っていますが、未来においてやっとその発達の完成に到達します。その性質において今日の物質体は人間のうちでもっとも完成された構成要素なのです。物質体を研究する人、しかも単に解剖学的物理学的にはなく、心情と心にしみわ

たように研究する人は、物質体の中に組み込まれている巨大な叡智の前に驚嘆しつつ立ち尽くすでしょう。私たちの物質体はその最小の部分のどれをとっても、完成された、知恵に満ちた構造を示しています。例えば、この物質体のうちで大腿骨のほんの一片、大腿骨の一番上の部分をとってみても、これは一個の中身の詰まった固まりではなく、小さな梁が見事に組み合わされた、知恵にあふれた構造なのです。

精緻な梁がいかに組み合わされているか研究してみると、最小の実質の消耗で最大量の力が出せるように、そしてこの大腿骨の柱二本で上体が支えられるようにすべてが構成されていることがわかるでしょう。最も完璧な工学技術をもってしても、このような叡智によってこれほど少ない材料の消費でこれほど大きな力を展開する橋や骨格のようなものを建造することはできません。人間の知恵は人間の物質体を構築したこの叡智にはるかに及ばないのです。物質体のすべての部分に対しても同様です。神経組織を備えた脳を観察すると、これはすばらしい構造です。人間の心臓を観察すると - - 心臓はまだ完成していく途上にあり、将来もずっとずっと高度な完成に至るのですが - -、心臓もすばらしいものです。この物質体の完成と欲求や衝動、熱情を伴ったアストラル体を比較してみると、次のように言わねばなりません。アストラル体は将来物質体よりも高次に位置するようになるとはいえ、今日のところまだ比較的低い状態にある、と。今日人間が享楽への熱望として発達させているすべてのものにおいて、アストラル体は物質体を何百とない攻撃にさらすのです。人間が調達するアルコールやその他あらゆる享楽の中で欲望され満たされるもの、これらはすべて根本的に物質体の叡智に満ちたすばらしい構造に絶え間なく攻撃をしかけるまさに心の毒なのです。アストラル体が、今日すでに物質体が完成状態で有しているものに行き着くには、長い進化期間が必要なのです。

私たちの神智学的宇宙論が提出する進化論では、物質体はすでに古い土星上で物質体としての性質を有し、太陽、月、地球進化を経て、さらに完成度を高めてきたということでした。ご存知のように、第二段階、すなわち古い太陽上でエーテル体が加えられ、従って今日エーテル体は進化という点で物質体より一段階低い状態にあるのです。さらに、古い月上でアストラル体が付与されました。アストラル体はこの月進化と現在までに完了した地球進化の一部しか経ていません。自我は地球上ではじめてつけ加えられたので、人間本性の四つの構成要素の中では「赤ん坊」の状態です。

昨日お話しした動物の集合魂を貫いているあの叡智は、本来人間の物質体に刻印されています。この叡智は、知恵にあふれた構成を持つ人間の個別の物質体へと移行したのです。人間のエーテル体はまだその完成の途上にあり、地球進化の経過の中で、その完成のために必要なものをすべて自らのうちに取り入れるのです。

地球が目標を達成したあかつきには、地球はアストラル状態へ、そしてさらに高次の状態へと移行し、その後、地球を引き継ぐ木星と呼ばれる惑星に変化します。その時、人間のエーテル体は、地球上で物質体が完成した性質を持つように、完成されているでしょう。その次にくる地球の受肉状態、通常未来の金星と呼びならわしている状態においては、人間のアストラル体が完成に至るでしょう。その時、アストラル体は今日物質体の状態、そして次の惑星状態でのエーテル体の状態と同じ段階に至るでしょう。そして最後に、地球がヴルカン状態に到達する時には、私たちの自我が完成されていることでしょう。従って、実際、次のようにいうことができるのです。地球上では、人間の物質体のみが人間と言えるものであり、地球の次の惑星状態では人間のエーテル体が人間であり、その時、エーテル体は地球が人間に与えることのできるもの、すなわち愛によって浸透されているであろう、と。

今日、人間の物質体はその独自の特性として担っているものは、古い月に負うところのものです。神秘学においては、古い月は叡智の宇宙と呼ばれています。当時、古い月上では少しずつ現在人間の物質体に見いだされるものが準備されていました。ちょうど私たちの物質体であるものが月上で叡智に貫かれていたように、後の地球の木星状態に見いだされるべきもの、すなわち完全に愛の要素に貫かれたエーテル体が愛の宇宙を通して準備されるのです。今日私たちが物質体の骨の一部に現れている叡智に驚嘆するように - - 比較のためにこう言うてよければ - -、木星人間はエーテル体に驚嘆することでしょう。エーテル体ちょうど地球上の物質体が叡智に貫かれて形成されているように、愛の力に貫かれているからです。

このことを心にとどめておいていただくなら、本来人間の物質体がようやく真の人間といえるものであり、ようやく本当の意味で人類の段階にあるという見方を受け入れ、この事実を認識していただけたらと思います。人間のエーテル体はまだ人類の段階ではなく動物の段階であり、人間のアストラル体はまだ植物の段階です。夜眠りにつきアストラル体が離れるとき、物質体とエーテル体は夢のない眠りに沈みます。

これは植物に終始見られる状態です。人間のアストラル体は、その意識状態に関しては植物の段階にあります。自我に至っては、ようやく鉱物界の段階に達している状態です。自我 - 人間の意識状態は、まったく鉱物界の段階そのものです。この真実に従って、ちょっと認識として有しているものすべてを調べてみてください。正しく認識しようとしてください。そもそも人間が理解できるものは何なのでしょう。人間は鉱物界の物理的法則を理解できます。その法則に従って機械や工場、建築物等を建造できるのですから。これらすべては鉱物界の物理法則に従って行われます。植物の場合、もう当然人間は生命そのものは知性をもってしては理解できないと言わねばなりません。将来、人間が今日鉱物を理解しているのと同じように植物を理解するときがくるでしょう。そのときには、今日聖堂や家や機械類を鉱物界の法則に従って建造するように、植物でも作り出すことができるようになるでしょう。現在、自我が貫かれているのはすべて鉱物界の法則なのです。

科学は、いつか生命ある存在を実験室の中で製造するという理想が実現するのを期待しています。これは、人類が道徳的進化のある特定の必要な段階に達しなければかなえられないでしょう。もし人類が今日すでにそういったことができるとしたら困ったことです。今日鉱物的な法則に従って時計を製作したり家を建てたりするように、将来人間は生きているものの法則に従って生きているものをつくりだすようになります。そのときに人間は生きているものに生命そのものを刻印できるようになっていなければなりません。そのとき実験室の机の前に立つ者は、自らのうちからあのいわば自らのエーテル体のなかにある振動を、生命を与えられるべきものの中へ導入していくことができるようになっていなければならぬのです。善良な人間であれば善のものを導入しますし、良くない人間であれば良くないものを導入します。ただ神秘学においては次のような教理があって、サクラメンタリズム（秘蹟主義）の秘密を修得しないうちは、生命製造の秘密と呼ばれるホワイト・ロッジの知識は人類に伝授されないとされています。

サクラメンタリズムとは、人間の行為が道徳的完成、神聖さの炎に燃え上がっていなければならぬということを表しているのです。人間が作業を成す実験台が彼にとって祭壇となり、彼の行為が神聖なものとなったときはじめて、人間はこのような知識を伝授されるにふさわしく成熟するのです。唯物主義に染まった今日の人間たちには、その実験台がいかに祭壇にはほど遠いものであるかを考えてみてください。

このように人間の意識は鉱物意識から植物意識へと高められていくのです。もうひとつ神秘学の教理があります。もはや自分自身の幸せを他のすべての人々の幸せと分離できなくなったときにはじめて、人間は植物意識の状態に到達するという事です。個々人が他の人々の負担のもとに自らの幸せを追求するがぎり、意識が一段階上に引き上げられるという状態は起こらないのです。

以上のように、私たちは物質体においてようやく本来の人間の段階であり、エーテル体ではまだ動物の段階、アストラル体では植物の段階、自我においては鉱物の段階なのです。このような事実のうちひとつのこと、つまり私たちはエーテル体においては動物の段階であるということを中心に留めておきましょう。エーテル体は地球に存在する間にだんだんと人間の段階へと進化していきます。ますますいっそうエーテル体は愛によって、ひとりの幸せを他のひとの幸せからもはや分かたつことのできないあの愛によって貫かれます。まず最初に物質体が仕上げられ人間の段階に到達したように、今度はエーテル体が、そして次にはアストラル体と自我も、人間の段階へと高められるでしょう。自我はまだ鉱物の段階です。自我は地球上ではじめて人間に組み込まれたのです。

今度は、私たちの魂、つまり感受魂、悟性魂ないし心情魂、意識魂と意識魂の中に含まれた霊我ないしマナス、これらとエーテル体との関係を考察してみましょう。私たちのエーテル体自体は動物の段階にあります。下の方（黒板に書かれる - - 図参照 下から上へ）の人間の高さに物質体があります。とりあえずエーテル体は省略します（図では点で示されている）。私たちのアストラル体、魂の第一の構成要素である感受魂を含むアストラル体は植物の高さにあります。さらに、悟性魂ないし感受魂が続きますが、これらはすべて植物の段階にあります。さらに上方には、今日の人間に見出せる限りでの霊我ないしマナスを含んだ自我ないし意識魂があります。

鉱物

意識魂 /

自我 / 霊我ないしマナス

悟性魂

植物・・・・アストラル体 /

感受魂

．．．

人間 - - - 物質体

とりあえず動物段階のエーテル体は省略しました。今度は人間のどの構成要素の中にも一定のやり方で他の構成要素が現れているということを明確にしておかねばなりません。人間の物質体はまず第一に物質体そのものの開示を自らのうちに表現しています。感覚器官を観察すると、物質体のうちに物質的原理が表現されているのがわかります。目の中には一種の写真機、カメラが、耳の中には一種のピアノがあるとこのわけです。つまり、感覚器官のなかに物質的原理そのものが表現されているのです。人間の腺を観察しますと、腺のなかにエーテル体が表現されているのが見出せますし、神経組織の中にはアストラル体が、血液の中には自我が表現されているのが見出せます。「血はまったく特性のジュース」なのです。血を所有する者が人間の自我を所有するのです。悪魔が人間の血を所有すれば悪魔は自我を得るのです。

このように人間の物質体のなかに他のどの構成要素も入り込んでいて、それが物質体のなかで表現されています。血液は無意識に脈打っています。血液のなかで活動する自我は、その物質的な経過を意識していないからです。物質体の中に他の構成要素の本質が現れているのと同様、エーテル体のなかにも他の構成要素の本質が現れています。もっともこの場合は「人間的に」現れているのではなく、「動物的に」、しかもある特定の動物の形で、外部に存在する動物の形姿と一定の類似を持つ形で現れています。このようにエーテル体の下にあるもの、つまり物質体が影像のように現れているのです。人間本性の物質的部分が現れているエーテル体のこの部分は、「人間」と呼ばれています（黒板に書き込まれる）。エーテル体の中に現れているアストラル体、感受魂は、そのエーテル形姿が似ていることから、「獅子」と呼ばれています。エーテル体の中に現れている悟性魂は、「雄牛」あるいは牝牛と呼ばれ、霊我を担う意識魂は、霊視的にみたエーテル形姿が似ていることから「鷲」と呼ばれています。

鉱物					意識魂 / 自我 / 霊我ないしマナス
			悟性魂		
植物		アストラル体 / 感受魂			
エーテル体 (動物)	人間	獅子	雄牛	鷲	
人間	物質体				

こうしてここに（図参照）黙示録の四つの徴（しるし） - - 人、獅子、雄牛、鷲 - - が、四つの本質的構成要素の、人間のエーテル体における現れとして挙げられます。このことから、人間本性を表すのにこれらの意味深い象徴（シンボル）形象を考え出した私たちの祖先は、空想や哲学、思弁から作り出したのでも明敏さによって案出したわけでもなく、実際にある世界から、つまり隠された事実の世界から作り出したということが見てとれるでしょう。

さて、ここで明白にしておかなければならないのは、これらの四つの表現は、どんな人間にも同等に生じているわけではないということです。ある人の場合、四つのうち一つの表現が優勢であり、別の人の場合にはまた別の表現が優勢となります。むろん、人類全体をその進化において考察せねばなりません。物質体そのものが最も強く現れているのはどこか観察してみると、その最も強い現われは、没落しつつある赤色人種、アメリカ・インディアンの場合、優勢である骨組織の特別な形成の中に見出せます。エーテル体が物質的に特別に現われているのはどこか見ようとするなら、これはまた別の人種、黒色人種の場合、腺組織の中に探さなければなりません。植物のひとつの性質は、炭素分離において見いだされます。[ここで筆記に欠落] とりわけ強く神経組織が物質段階に現われ、それとともに敏感さも現われている人間は、マレー人種の中に見いだされます。そしてとりわけ血液組織が現われている人種はモンゴル人種です。マナスの原理を養成しはじめている人間の一部はコーカサス人種に見いだされます。こうして神秘的な真実

から人種の分類ができました。今日の人間の中に見出せるものは、ある人種の場合、あるものが優勢で他のものは後退しているというように、人類全体に配分されているのです。

このような差異は人間のエーテル体の場合にも見いだされます。肉眼で物質体を観察するように、霊視によってエーテル体を観察してみると、人間においてエーテル体は、人 - 人間、獅子 - 人間、雄牛 - 人間、鷲 - 人間に分かれているのが見られます。これらの集合自我はアストラル的性質のもので、霊視者はアストラル界において動物の集合自我と人間の個別的自我の中間に人間の集合自我が位置しているのを見ます。時間的に過去にさかのぼるほど、人間はエーテル体に関してはこれら四つのうちのひとつの形態をとっていることが多くなります。これら四つの魂のグループはそれぞれひとつずつ人間の集合魂、つまり、ひとつは人間 - 集合魂、ひとつは獅子 - 集合魂、三つ目は雄牛 - 集合魂、四つ目は鷲 - 集合魂に帰せられます。ただ、これらの物質的な動物の形姿からとられた名前にあまりにこだわりすぎると、これについて誤った観念を持つことになってしまいます。このような獅子 - 人間のエーテル体は、物質界の個々のライオンに似ているよりもずっとライオンの集合魂の方に似ているのです。キリスト教は、福音史家たちについて、彼らの魂は通常の人間の魂のようではなく、人間のグループ全体を含むことを提示してきました。内的な魂の性質に従って、マタイは人に、マルコは獅子に、ルカは雄牛に、ヨハネは鷲に比較されてきました。これは、キリスト教的秘教が福音史家ひとりひとりの魂に帰してきた類似性に由来するものです。人間が、ある面では下降において、またある面では上昇において理解されるということを見ていくと、このことをもっと正確に理解できるでしょう。この地球上で唯物主義の最も深まった時点で、人間は個別的魂の原基を獲得しました。人間はひとつひとつの集合魂、人 - 人間、獅子 - 人間、雄牛 - 人間、鷲 - 人間をもっと厳密に区別していた古い時代から下降してきました。人間が将来再び上昇していったとき、人間はその個別的魂を保持したまま、より高次の段階においてより高次の意識で、以前には単にぼんやりとした意識のなかに有していたもの、つまり四つの集合魂を再び発達させることでしょう。そういうわけで、キリスト教においては、福音史家たちに、これらの特性が付与されているのです。

もうしばらくの間、この人間の集合魂の概念にとどまってみましょう。これらの集合魂は、空間的に、つまり並列的に生きているというよりは、むしろ時間の中で相次いで生きているのです。動物の集合魂を観察してみると、ライオンのグループや鯨のグループを考えるなら、それらに共通の集合魂はアストラル界に並列的に存在しています。けれども、人間の集合魂を観察するときは、もっと時間というものに目を向けなければなりません。人間の集合魂はエーテル的なもののなかで、いわば物質界とアストラル界の境界領域である特定の時期に生まれ、再びある特定の時期に変化してゆくのです。先に述べたこれら四つの集合魂は、単なる四つの主要なタイプであって、無数の中間段階が存在するのです。最も特色ある人、獅子、雄牛、鷲という形姿を挙げましたが、これらはどのようにも混合することが可能です。

ひとつの人間集団を観察してみましょう。例えばひとつの種族、古代中央ヨーロッパのいずれかの種族、ここではヒュルスカー族をとりあげてみましょう。このような種族がいったんあらわれては消えていきます。唯物主義的な世界観察者は、ヒュルスカー族であるもののなかに、そもそも何か抽象的なもの、種族をまとめるひとつの概念しか見ていません、神秘学者はヒュルスカー族の中にひとつの集合魂を見ます。この集合魂はヒュルスカー族が歴史に登場したときに現われ、「生まれ出」て、ヒュルスカー族が勢力を増すとともに成長し、ヒュルスカー族が歴史から消えるときに、「死ぬ」のです。進展してゆくヒュルスカー族の背後に、神秘学者はひとつの進展してゆくエーテル存在を見るのです。もっとも、エーテル存在とこの地上の物質的存在の間には差異があります。物質的存在は物質界で生まれ、成長し、生の最高点に達して、また死にます。誕生と死が物質界の存在の特徴をなすものです。アストラル界の動物の集合魂を数千年に渡って追求してみると、これらの生成と消滅は「誕生」と「死」という言葉ではまったく表現できません。まったく別のものに基づいているのです。すなわち変化、変容です。霊視的な能力をもってアストラル界で今日ある動物の集合魂に出会い、その集合魂の以前の受肉、つまり1500年前にこの動物の集合魂がどうであったかを思い出すとすると、これはもっと年の若い人を観察するというにはならないのです。もちろん、集合魂もやはり青年期、中年期、老年期を経ていきます。けれども集合魂は老年期に意識を捨てることなく死ぬこともないのです。死を通過することなく絶え間なく変化し続けるのです。皆さんは動物の集合魂をずっと太古の昔までさかのぼって追求していけます。つまり、変容があるのみで誕生と死はないのです。

ヒュルスカー族のそのような集合魂の場合にも同様のことがあてはまります。ヒュルスカー族が何人

かの肉体を持つ人間として物質界に現われると同時に、ヒュルスカーの魂が形成されたのです。けれどもヒュルスカー魂が生まれたというのではなく、別の時代から作り変えられ変成させられたのです。この魂はヒュルスカーの勢力とともに成長し、ヒュルスカー族が頂点に達したときに頂点に達し、ヒュルスカー族が物質界における歴史のなかで後退し消えてゆくときには、ヒュルスカーの魂は別の種族の魂となるために新たに若返るのです。つまり、魂は変容するのです。高次の世界において魂を観察すると物質的な誕生と物質的な死は存在しません。私たちの知っている誕生と死は物質界のみに存在するのであって、高次の世界には存在しないのです。神秘学の叡智はこのことをよく心得て表現していて、その際、数に対しては非常に注意を払っています。ある特定の間人集団に属する集合魂がいつ成立して別の魂から変容して成長し、頂点に達して再び下降していき、さらにまた別の集合魂に変化してゆくのか、平均の数を決定しようとしてきました。人間の寿命を平均75歳と見積もって - - この数を大陰暦年とみなして - - 7を掛けると、四つのタイプにおける人間の集合魂の次の変化までの生命が明らかになります。ここでは7によって世代が意味されているのです。この場合、大陰暦年であることを考慮すると - - およそ500年となります。従って、神秘学においてはこう言われています、ひとつの集合魂は別の集合魂に変わる、その意識を失うことなく、新たに自分自身を生み出す、と。

このような集合魂の自我を観察し、この自我のための外的な表現手段を物質的なものに探すとすれば、これは血液なのです。血は神秘学者にとって火の現われであり、火で燃え立たされた実質です。人間の物質体が土の現われであり、エーテル体が水の現われ、アストラル体が空気の現われであるように、まだ利己主義に縛りつけられていない自我は火の現われなのです。ですから - - このことは明日またお話しますが - - 、血は利己主義を通して死を見出したといえるのです。人間の自我は自分自身によって「自らの火の中でわが身を焼き付くし」ています。これは神秘学上の表現です。人間は利己心を克服するときのみ、不死性に到達するのです。人間の集合自我は自らの火のなかで身を焼き付くします。500年が過ぎると、集合自我は燃え尽き、自己自身から新たな形姿を創造します。このことが神秘学では、集合自我は一般に500年生き、それから燃え尽きて自らの火から再び命を吹き込まれると叙述されます。これが「不死鳥（フェニックス）」と呼ばれているのです。フェニックスについての美しい伝説は、このように事実即した背景を有しているのです。フェニックスは四タイプの特性をもつ集合自我なのです。それは七世代後に燃え尽き - - 一世代を75大陰暦年と計算して - - 復活するのです。

これがフェニックス伝説の真実の背景です。こうして皆さんは、フェニックスに関するような古い伝説は極めて奥深い神秘学的事実から創られたということの新たな証明を得られたわけです。ここで、何百年にもわたって神秘学の学院で教えられてきたこと、そして実際の、示威しに即した経験 - - 神秘学の記号や封印はそれを表現しているのですが - - が示していることを、あれこれ思弁を弄するのではなく、明示せねばなりません。

このような神秘学の真理の表現のことを聞き、これを人類が記号や象徴のなかに保存しているものと比較してみると、人間の意識はいかに多くのことをそれが悟性的意識となる以前にすでに創造していたのが繰り返し思い出されます。人間はしかし、今日我々はすでにずいぶん進歩したと信じ込むものです。けれども、人間の悟性は、過去の世の創造的意識、これはむろん秘儀参加者のみが有し、彼らはこれを伝説の中に隠したのですが、この創造的意識にはるかに遅れをとっているのです。四種の動物についての象徴は考え出されたものではありません。その出発点、起源となっているのは、思考ではなく、観ること（Schauen）なのです。

私が「集合魂は物質界とアストラル界の間の境界のエーテル的なもののなかにある」と言っても、ひとつの境界線を想像しないでください。物質界から出発しますと、ここに（描かれる）物質界の七つの小区分があります。続いて、アストラル界の七つの小区分がくるのです。これらのうち下から三つまでの区分は、物質界の上から三つまでに区分と重なり合っています。つまり、物質界の上位三区分が同時にアストラル界の下位三区分でもあるというように、アストラル界は物質界にはめ込まれていると見なさなくてはなりません。これはいわば周辺地帯です。私たちの魂が死後、熱望によって地上につながとめられているときに、離れられないところで、カマローカと呼ばれます。

 ----- | 周辺地帯(Randzone)
 ----- | カマローカ(kamaloka)
 ----- |
 ----- アストラル界

 物質界

このように、ここで最初の例として選び出した神秘学の記号、象徴、封印のなかに、深い神秘学的事実から得られたものを見出すことができます。従って、神秘学の学院における深い過去の叡智を誤解したり、それらが現代の知識によって何らかの方法で克服されたとみなしたりすると、まったく道を誤ることになります。神秘学の教えの叡智に記号や象徴のなかで向き合うところではいつも、それらは直接の神秘学的考察によって確認されるということが示されます。神秘学の教えが比較的遠くない時代に作用していたことの例は、名前や言葉に象徴的な意味が秘められていたということですが、これらの根底にある真の意味は高次の世界の事実なのです。文献学の意味における言語形成の起源にさかのぼるというわけではありません。これからお話しすることは、文献学によって確かめられることではありません。たとえ文献学的に誤りとされたとしても、言葉の象徴学はやはり正しいのです。

物質界から出発してアストラル界を通り、デヴァチャン界へとさらに高く上昇していくほど、すべてが物質界の鏡像として眼前に現われてきます。この鏡像をまず読み取ることを学ばねばなりません。学徒たちにとっての数は、最も学びやすいものです。この物質界の543という数があるとします。この数はアストラル界では鏡像としてありますから、345と読みとれるわけです。同様に他のあらゆる事物や出来事も鏡像として読み取ることができます。少々極端な例を挙げますが、この物質界で鶏が卵を生み、その卵から雛がかえるようすをたどってみてください。これと同じ出来事を、雛がいてこれがしだいに小さくなり最後に卵の中に入り込むというふうに、時間も逆行するわけです。これを初めて目にする学徒にとってはどんなに当惑することかわかりでしょう。人間から発する情熱は、タブローに描かれたように見えます。情熱は中心点から発します。この情熱の反映は、まったく動物が押し寄せてきたときのように現われます。低級な情熱はありとあらゆる野生の獣たち、ねずみやラットのようなものに見えるのです。学徒がこのことを学んでいなかったら、自らの情熱がねずみやラットとなって自分のほうへ押し寄せて来るのを見るとき、これが最初の経験であれば、容易に迫害妄想その他の病理学的な状態が現われ得るのです。

ここで皆さんに高次の世界の低次の世界に対する関係についての事実としてお話ししてきたことを、人々は言葉遊びとしての進化論のなかに象徴的に表現しようとしてきました。人間が地球での生存に入ったとき、人間はエヴァ[Eva]を通じて霊的な状態から感覚的な状態に入り込んだのです。エヴァのなかに人々は霊的な人類が物質的になった、すなわち罪を負うこととなった状態を見ました。人類を再び霊的なものへと上昇させ、世界に死すべきものをもたらした女性とは反対のものを表現しようとする、逆に人類に再び不死性をもたらすべきものが表現されねばなりません。つまり、名前が逆にされねばならないのです。そのため神の天使はマリアに対して、「アヴェ・マリア[Ave Maria]！」という言葉で語りかけたのです。エヴァからマリアとなる(Eva Ave)のです。この逆転は象徴的な意味をもっています。多かれ少なかれ本末転倒の文献学がこれに対して何と言おうと問題ではありません。重要なのは、神秘学においては、象徴的なものが語の組み合わせにおいて作用を及ぼし、この言葉を発することで、人間が物質界を霊的世界はその流れにおいて逆方向であるという神秘学的事実を意識するように求められてきたのです。

このことは大変深い意味をもっています。その背後に何か恣意的なものは見ないでいただきたいのです。背後に見出せる最良のものは、人間は言葉のなかに神秘学的な合法則性を認識するためにこのような実習をさせられることにより、意識的にせよ無意識的にせよ、神秘学的修行を行なっているのです。象徴学の原理は同時に修行の原理なのです。